
反面ライダーディケイド～バカとテストと召喚獣の世界～（ W、オーズ、フォーゼも登場！ ）

ネガ・ナハト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜バカとテストと召喚獣の世界〜（W、オーズ、フォーゼも登場！）

【Nコード】

N2073X

【作者名】

ネガ・ナハト

【あらすじ】

門矢士一行が次に来た世界はなんと、バカとテストと召喚獣の世界！？リイマジとWとオーズ、さらにはフォーゼも登場で笑いあり、涙ありの展開になること間違いなし！？

あらすじ

世界の破壊者・デイケイド。いくつもの世界を旅した彼らが次に来た場所。写真館の絵には、人間をデフォルメ化したようなのが様々な格好や武器を装備して戦っているものだった。

「また、仮面ライダーのいない世界なんでしょうか？」

「だが、こういうのは悪くない。しかも、なんだか面白そうな気がするよ。」

「どこからそんな自信がでてるんだよ。」

「全くだよ。士には呆れたよ。」

この四人は様々な世界を旅してきた、門矢士、光夏海、小野寺ユウスケ、海東大樹。彼らは仮面ライダーとして様々な世界で様々な敵と戦ってきた。四人は外に出ると服装が変わり学生服を身に付けていた。

「って、あれ？いつもは士だけなのに」「本当ですね。私たちも変わっていますね。」

「どうなってるんだい？」

「ほ、お、みんな学生服か。」

出てきたのは、光夏海の祖父、光栄司郎。

「まあ、とりあえず行ってみるか。……文月学園に。」

あらすじ(後書き)

次回、

第1話「運命の振り分け試験」

第1話 運命の振り分け試験

士たち四人は、文月学園に着き正門の前にあつた看板を見て、急いで教室に向かった。看板に書いてあつた内容は、

「文月学園振り分け試験日」と、書かれていたため、正門の前にいた筋肉質の先生に自分たちの教室を指示されたため、急いで行く。ユウスケは、教室に着くと、見覚えのある人物を見つけたが、はっきり言つて時間がないため、すぐに席に着き、筆記用具を出した。チャイムが鳴り、プリントが後ろから配られていく。

「（難しいなあ……そもそも俺つて、勉強そんな得意じゃないしなあ）」

振り分け試験が終わり、ユウスケは見覚えのある人物たちの所に行くとやはり、過去に旅をしたときにいた、辰巳シンジ、尾上タクミ、剣立カズマ、アスム、ワタルたちだった。士たちの話しによると、Wの二人と鳴海亜樹子もいたとのことだった。

「だが、見たことのないやつもいたな……。火野英司、アंक、如月弦太郎、歌星賢吾だったか……？」

「僕のところには、照井竜、後藤慎太郎だったかな……？」

「私がいた教室には、泉比奈、城島ユウキという方がいました。」

「そういえば、シヨウイチさんとソウジさんがいなかったな……」

「明日はクラス分けだろう？明日の支度をして、もう寝たらどうだい？」

「そうですね、そうしましょう」

ちなみに彼らは会っていなかったが、野上幸太郎もいるはずだったのだが、この世界に来た瞬間テイとはぐれるは、文月学園の場所が分からなくて振り分け試験に間に合わなかったなど、散々であった。

翌日、振り分け試験クラス分け発表

Aクラス
門矢士
海東大樹
尾上タクミ
フリリツプ
照井竜
後藤慎太郎
歌星賢吾
城島ユウキ
Dクラス
光夏海
鳴海亜樹子
泉比奈
Fクラス
小野寺ユウスケ
辰巳シンジ
剣立カズマ
アスム
ワタル
左翔太郎
火野英司
アンク
如月弦太郎
野上幸太郎

という結果になった。これから先、彼等彼女等を待つ学園生活はどうなるのだろうか……。

第1話 運命の振り分け試験（後書き）

次回、

第2話「入学！文月学園！」

リイマジ、W、オーズ、フォーゼ、幸太郎がバカテスの世界に来た経緯はいつか書きます。

第2話 入学！文月学園！

ユウスケ side)

今日は文月学園の入学の日か……。土と海東は、「Aクラスは文月学園のエリートだからな、早めに行かないとな」と、ムカつく言葉を残して、さっさと文月学園に行ってしまった。因みに写真館から文月学園は20分位で着く。まだ7時半だったのに、早すぎだろ……。夏海ちゃんは昨日振り分け試験で知り合った、亜樹子ちゃんと比奈ちゃんと一緒に行くそう。俺はシンジ達と合流して一緒に行くつもりだ。因みにシンジ達は写真館の隣りにあるアパート「学陽荘」に住むことにしたらしい。部屋の振り分けは一階一号室にはシンジとカズマとタクミ、二号室にはワタルとアスム、三号室には幸太郎、四号室にはシヨウイチさんとソウジさん。なんとこの二人は先生なんだそう。 (シヨウイチさんが古典でソウジさんが日本史だそう) 二階五号室には如月弦太朗くん、歌星賢吾くん、城島ユウキちゃんという感じだ。Wの四人はそのまま探偵事務所、オーズの五人はクスクシエというコスプレ喫茶店で住むことにしたらしい。五人というのは、英司さん、アंक、比奈ちゃん、後藤さんと後一人伊達明という保険体育の先生のことだ。とりあえずシンジ達と一緒に

文月学園を目指した。一緒に歩いているときみんなに事情聴取をしたらいつも通りの生活を送っていたら例のオーロラに飲み込まれてしまったんだそう。話してるとき思ったことは初めて見る映司さんとアंकと後藤さんと弦太朗くん和賢吾くんとユウキちゃんは思った程かなりいい人だった。話しをしているといつの間にか文月学園に到着していた。

「じゃあ、私と賢吾くんは2・Aだから、頑張つてね弦ちゃん」

「おう！ユウキと賢吾も頑張れよ！」

「くれぐれもその場違いの学ランをバカにされないようにな……」

確かに弦太朗くんの服装は俺達と違って不良のような着方をしていた。生活指導の先生に絶対注意されるな……。

「火野、アंकお前達も頑張れよ」

「はい、後藤さんも頑張ってください」英司さんも後藤さんを見送った。

「じゃ、俺は職員室に行きますか」

「では、俺達も」

「行くとするか」伊達さんとソウジさんとシヨウイチさんは職員室に向かった。その後Aクラスにはフィリップと照井さんが行った。

「じゃあ私たちはDクラスだから」

「ユウスケも皆さんも頑張ってくださいね」

「映司くんもアंकも頑張ってくださいね」

「うん、比奈ちゃんもね。ホラ、アंकも」

「……………」

アंकは決して悪い奴じゃないけど、妙に無愛想だ。

「ところでよお、Aクラスの教室見たか？」

「ああ、あれは凄かったな」

「デスクトップに個人エアコンに冷蔵庫に黒板はスクリーンボードと来たからなあ」

「あの設備で勉強できるタクミ達が羨ましいよ」

「え？僕達もあの設備で勉強できるんじゃないんですか？」

「分かりませんよワタル。さっきから教室を見てみると設備がほとんど貧乏になつているような気がするんです。」

「ま、まさか俺達のFクラスはとつともなく貧乏だったりして……………」

「ああ、床は畳でカビが生えていて机はボロい卓袱台で、椅子は綿があまりない座布団でとどめは隙間風が酷い壁かも知れないな……………」

「……………」

沈黙する俺達。

「い、いやそんなことはないだろう」

必死に反論する弦太朗くん。アंकの言っていることが合っていて

それで何か怖い。意を決してFクラスの教室を目指す俺達。そして、
教室の前に着いた俺達は、再び沈黙する。

「」……「」

大丈夫か……俺達の学園生活……。

第2話 入学！文月学園！（後書き）

次回、「自己紹介は、人生の左右」

映司「俺の名前間違いきじじゃない……？」

作者「ホントにスマン」

カズマ「学陽荘の名前のモデルは、文学と月の反対の太陽からだそ
うだよ」

第3話 自己紹介は、人生の左右

自分たちの教室の前で沈黙するユウスケたち。それもそのはず、先ほどAクラスの教室を見たユウスケたちは自分たちFクラスの教室が、あからさまにボロいのだ。まだ中は見てないが、見た目だけでこのボロさ……。一体中はどうなっているのか。

映司「こういう感じの教室って、絶対不良とかいそうだよな。」

弦太郎「何言ってるんだ。こんなの見た目だけだ！中に入れば、きつと心優しい奴が待っているに違いないぜ！」

ワタル「あなたほどプラス思考で緊張しない人初めて見ましたよ」

弦太郎「こんな所でウダウダしてもしょうがねえ！俺から入るぜ！

（ガラツ）すまねえな、ちよつと遅れちまったぜ！」

???「早くすわれ！明久以下のウジ虫野郎！」

弦太郎「何だと！俺達はウジ虫なんかじゃねえぞ！」

アスム「たちって、僕らも含まれているんですか!?!」

???「やめなよ、雄二！人をウジ虫呼ばわりするのは」

雄二「…それもそうだな、ウジ虫は明久で充分か」

明久「それもダメだよ！」

弦太郎「…オイ、お前、コイツに謝れよ」

雄二「何だお前は。なぜ俺がコイツに謝らなきゃならない」

弦太郎「そんなの簡単だ！コイツはウジ虫なんかじゃねえ…365度どこから見ても美少年で目が生き生きしている男の中の男だ！」

映司「弦太郎くん、5度多いよ」

弦太郎「うそ!?マジで!?!」

雄二「ハハハ、コイツは驚きだ。明久並みの馬鹿がこんな所にいるとはな。世界は広いもんだぜ」

弦太郎「何だと！テメエ!?!……」

福原「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

弦太郎「え？お、おうすまねえな」

福原「おや…随分と派手な服装ですね。文月学園の制服は貰っていないのですか？」

弦太郎「いや、俺はこの服装が気に入ってたんだ。別にいいだろ？」

福原「それでは困るんですがねえ…まあ、仕方ありません今回だけ良しとしましょう」

弦太郎「マジで！？やったぜ！」

福原「今回だけですよ。あなた達も早く席に着いてください」

「…あ、はい……」「」

福原「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしく願います」

福原は薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、やめた。チヨークすらろくに用意されていないのだ。

福原「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい。」

翔太郎「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

福原「あー、はい。我慢してください」

カズマ「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

福原「木工ポンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

ユウスケ「先生、窓が割れていて風が寒いんですけど」

福原「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しましょう。必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

・・・

映司「アंकが言ったこと、全部正解じゃないかー！！」

アंक「うるさいぞ映司」

福原「…では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願います」

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

カズマ「へえ、随分と可愛い子だなあ。でも、何で男子の制服着

てるんだろ？」

秀吉「お主、それはワシが男に決まってるからじゃろ」

カズマ「ええ！？うそ！？可愛いって言うてごめん！」

秀吉「いや、そこまで必死に謝らんでも…まあ、今年も一年よろしく頼むぞい」

康太「……土屋康太」

シンジ「土屋くんって、カメラに興味があるの？」

康太「……何故そんなことを聞く」

シンジ「え？だってそのポケットから出てるの、デジカメじゃないの？」

康太「……忘れる」

シンジ「????」

美波「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

映司「海外かぁ。どこの国なの？」

美波「趣味は吉井明久を殴ることです」

映司「スルー！？俺の質問スルーした上に、趣味が恐ろしいよ！後、なんか震えてる子いるけど、君が吉井くんなんだね！？」

ユウスケ「じゃあ、俺か…小野寺ユウスケです！みんなの笑顔が大好きです！よろしくお願いします！」

「……」

ユウスケ「え、ちよ、なに！？その変態を見るような目は！」

シンジ「辰巳シンジです。趣味は写真撮影です。よろしくおねが…

……」

康太「……（ぐっ）同志」

シンジ「え？握手はありがたいけど、何の？」

カズマ「剣立カズマです。あの……その可愛い女の子を見るような目はなんですか……？」

「……」

アスム「アスムです。趣味は、和太鼓と歌舞伎です。よろしくお願

いします」

秀吉「おお、お主歌舞伎ができるのか!？」

アスム「ええ、まあ……」

秀吉「(ぐっ)是非今度演劇部でひろうしてくれ!」

アスム「あ…はいノノ」

野上幸太郎「野上幸太郎。……やつと喋れたよ全く」

ワタル「ワタルです。趣味はヴァイオリンを弾くことです」

翔太郎「左翔太郎だ……一年間よろしく頼むぜ……(ふっ、きまつ

たな。……その割にはナルシストを見るような目で見られてるのは

なんでだ……?)」

映司「火野映司です。明日のパンツとちよつとのこぜ……」

「あ、明日のパンツだつて!？」

「な、何てパンツへの執着心が高いんだ!」

「尊敬するぜ!火野映司!」

映司「???まあ、とりあえずよろしくお願いします」

アंक「(あのバカが……)アंकだ……」

弦太郎「如月弦太郎だ!俺の夢はこの学園のみんなと友達になるこ

とだ!!よろしく!」

明久「(さて、そろそろ僕か……)吉井明久です。気軽にダーリン

つてよんでくださいね」

『ダアアーリーリン!!』

弦太郎「おう!よろしくな、明久」

明久「失礼。忘れてください。とにかくお願いします。」

瑞希「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

福原「ちようどよかったです。今自己紹介をしているところなので

姫路さんもお願ひします」

瑞希「は、はい!あの、姫路瑞希といます。よろしくお願ひしま

す……」

「はいっ!質問です!」

瑞希「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

弦太郎「てめえ……！あいつがここにいちや悪いのか！」

「い、いやそういう訳じゃ……」

瑞希「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

幸太郎「うらやましい……俺なんて文月学園がどこにあるか分からなかったのより、マシだ……」

映司「……何があったの幸太郎くん？」

自己紹介を一通りすませた後、瑞希のところへ明久と雄二が駆け寄り、話をしていたが、福原先生が教卓を叩いて警告したが、その瞬間教卓がゴミ屑と化す。先生が替えを用意してくる間に明久と雄二は廊下に出て、話をしたあと、福原先生が教卓の替えを持ってかえってきた。

福原「坂本くん、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

雄二「了解」

福原「坂本くんはFクラスのクラス代表でしたよね？」

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなようによんでくれ。さて、みんなに一つ聞きたい。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが

不満はないか？」

「大ありじゃあつ……！」

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

映司「そうだ！そうだ！」

翔太郎「いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだろ！」

幸太郎「そもそもAクラスだっておんなじ学費だろ？この差は大き

すぎるって！」

雄二「みんなの意見ももつともだ。そこで、これは代表としての提案だが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた……。

第3話 自己紹介は、人生の左右（後書き）

次回、第4話「キーワードは「変身！」ではなく、「試獣召喚っ！」
（サモンっ！）」に、
スイッチ・オン！

第4話 キーワードは「変身！」ではなく、「試獣召喚っ！(サモンっ！)」

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何も…グフオア！』

幸太郎「モブの癖にラブコールすんな、気持ち悪い」

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

雄二「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

康太「……………！！(ブンブン)」

瑞希「は、はわっ」

雄二「土屋康太。コイツがあのお有名な“ムッツリーニ”だ」

康太「……………！！(ブンブン)」

『ムッツリーニだと……………？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしてるぞ……………』

『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ』

カズマ「……………つまり、往生際の悪いただのムッツリスケベじゃ……………」

雄二「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

瑞希「えっ？わ、私ですかっ？」

雄二「ああ。ウチの主戦力だ。」

「そつだ。俺達には姫路さんがいるんだつた」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」

ワタル「モテないモブの癖によくそんなラブコール送れますね。僕はあなたと違ってモブじゃないからそんな真似できませんよ」

「ワタル君ナイスフォロー」

雄二「木下秀吉だっている」

「おお……！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の……」

雄二「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったかな？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるつてことだよな！」

雄二「それに、吉井明久だっている」

「……シン」

明久「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！ホラ、折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを つて、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

弦太郎「そのとおりだ！士気が下がったのは明久のせいじゃねえ！てめえらモブの癖して、偉そうに明久を睨むんじゃねえ！代表の説明を聞いてからにしろ！」

明久「何だろう。僕今日凄く弦太朗さんに助けられている気がする……」

雄二「そうだな。如月の言うとおりだ。だったら教えてやる。コイツの肩書きは《観察処分者》だ」

弦太朗「……明久」

明久「な、なに弦太朗くん……？」

弦太朗「観察処分者ってなんだ？」

明久「え…と、その…」

雄二「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例としてもものに触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

瑞希「そうなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

明久「あはは。そんな大したもんじゃないだよ」

弦太朗「つまりソイツは、他の奴らと違って召喚獣の扱いが上手いってことだな！」

「おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

雄二「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

明久「雄二、そこは……」

弦太朗「てめえ！いい加減にしろ！」

雄二「なんだ如月。俺に文句があるのか」

弦太朗「大アリだ！てめえは明久を勝てる要素として見てるのか雑魚なのかはつきりしやがれ！」

雄二「俺は、一つの科目で勝負できないと雑魚だと言ってるんだ。」

弦太朗「なに…！」

雄二「無論…それは、お前たち転入生にも言えたことだ」

ユウスケ「ちよつと待って、それって逆に言えば一つの科目で勝負できれば俺達はモブより使えるってことだよな？」

雄二「その通りだ。とりあえず転入生も立ってくれないか？実を言うとお前たちもこのクラスにとつて重要な戦力なんだ」

「……ええっ！」「」

雄二「じゃあ、説明するぞ。みんなも聞いてくれ。」

雄二「まず、小野寺ユウスケ。コイツは古典ならば500点取っているんだ。」

「なにいいい！」

「う、500点だっつて！？」

雄二「次に辰巳シンジ。コイツは現代社会で400点後半は取っているんだ。」

「マジかよ！」

雄二「剣立カズマは、数学ならAクラス上位と互角だし、それ以下ならばはつきり言っつて敵じゃない。」

「Aクラス上位以下が敵じゃないって……！」

雄二「アスムの得意科目の日本史は400オーバーを誇るし、おまけに腕輪の能力の鳴刀・音叉剣はAクラスの召喚獣の盾を破壊する威力を持つっている」

「す、すげえ！盾を破壊しちまうのかよ！」

雄二「野上幸太郎は元々Aクラス並みの点数を持っている。もし振り分けでAクラスにまわっていたら強敵だった」

「おお！つてことは野上も姫路さんとおんなじ病欠だったのか！」

幸太郎「いや。学園の場所が分からなくて振り分け試験に間に合わなかつただけなんだけど……」

「………なんか、スマン」

雄二「ワタルはアスムの得意科目を世界史にただけだが……」

ワタル「アスムの世界史ヴァージョンなんてどこが凄いですか」

雄二「腕輪の能力が凄いです。相手クラスが優勢なフィールドだけ

をブレイクすることができんだ」

ワタル「なんですかそれ！？チートじゃないですか！」

雄二「左翔太郎は英語ならAクラスのモブどもを一瞬にして蹴散らせる。」

翔太郎「はん、さすがは俺だな」

雄二「火野映司は、英語と世界史の二つがAクラス並みだ。生物はだめだな」

『凄い！他と違って二科目もあるのか！』

ワタル「でもなんで生物がだめなんですか？」

映司「だって、蛇怖いし……」

ワタル「蛇以外にも学ぶものはありますよね！？」

雄二「アंकは生物が得意だが、他の科目は殆どBクラス並みだし、苦手科目がない」

映司「え？じゃあなんでアंकはFクラスに？」

ユウスケ「病欠だったんじゃないか？」

幸太郎「学園の場所分からなかったとか？」

カズマ「それ、あんただけ」

アंक「……………」

雄二「最後に…如月弦太郎。コイツは殆どの科目が駄目駄目だが…」

『それじゃあ、吉井並みにつかえないじゃない…』

弦太郎「…俺は友達作りのためにも人を殺したくはねえんだけど…」

『…、ごめんなさい！許してください！』

雄二「最後まで話を聞け。…コイツの得意科目は物理なんだが…その点数は担当の先生を超える程だ！」

『な、なにいいい！』

『ちよつと待て、あいつホントに不良なのか！？』

弦太郎「そんな驚かれてもよ…俺は単に物理が得意なだけで…」

雄二「その得意はAクラスを超える程まで得意になっちまったらし

いぜ…如月？」

弦太朗「雄二。本当の明久の實力をおしえてもらおうか…」

雄二「ああ、いいだろう…みんな、さっきは明久を《觀察処分者》と言ったが、それだけじゃない。明久は、日本史と世界史の二科目が姫路と互角なんだ」

「な、何だと！」

「姫路さんと互角だと！」

瑞希「凄いですね、吉井くん。本当なんですか？」

明久「う、うん。でも姫路さんと同じ位までは、知らなかったよ…」

雄二「とにかく、今挙げたメンバーを中心にすれば、絶対に勝てる！全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

「おおーっ！！！」

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

「うおおーっ！！！」

その後、明久と弦太朗がFクラスの使者として、Dクラスに宣戦布告しに行った。下位クラスの使者は酷い目に遭うという噂を聞いた弦太朗が一緒に行くといったのだ。

その時、雄二は気に食わない顔をしていたのは秘密だ…。明久と弦太朗が戻ってくると、二人共無傷だった。明久の話によると、確かに襲いかかってきたが、弦太朗が連中をシバいたため、無傷で済んだそうだ。その後、Fクラスの主力メンバーで屋上でミーティングをすることにした。

（屋上）

雄二「明久、如月。宣戦布告はしてきたな？」

弦太朗「おう、ばっちりだ」

明久「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

美波「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食べるよ？」

明久「そう思うならパンでも奢ってくれろと嬉しいんだけど」

映司「えっ？吉井くんってお昼ご飯食べない派？」

明久「いや。一応食べてるよ」

雄二「……あれは食べているといえるのか？」

明久「何が言いたいのさ」

雄二「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

「……」

明久「きちんと砂糖だつて食べているさ！」

カズマ「それ食べるとは言わないよね……」

アスム「“舐める”が、正解ですよ」

シンジ「……もしかして、吉井くんって一人暮らし？」

幸太郎「そうだとしても、どんな生活送ればそうなるんだよ……」

ユウスケ「逆に親と一緒に住んでたら、立派な虐待だよ」

雄二「ま、飯代まで遊びに使うお前が悪いよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」

翔太郎「いや、お前の趣味のせいだろ……ハードボイルド小説とか、

時代劇ものの

DVDとか……」

ワタル「それあなただけです」

瑞希「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

明久「彘？」

アスム「字間違えてますよ……一応正解ですけど」

明久「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

映司「……ねえ、吉井くんっていつからそんな食生活？」

明久「えつと……一年の時からずっと？」

「……おかず分けてあげようか？」

雄二「それで生きていけるお前の生命力とは大したもんだな……」

秀吉「良かったのう明久。」

康太「……女子の手作り」

明久「うん！」

美波「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井に“だけ”に作ってくるなんて」

瑞希「あ、いえ！その、皆さんにも……」

弦太郎「俺達にも？いいのか、瑞希？」

瑞希「はい。嫌じゃなかったら」

シンジ「でも、相当な人数だけど大丈夫？」

カズマ「もし何だったら俺達、自分の手作り弁当でいいけど……」

ユウスケ「えつ。俺ぶっちゃけ瑞希ちゃんの……」

瑞希「遠慮なんてしないでください。ちゃんと皆さんの分を作ってあげますから」

アंक「ここまで来たら断る理由はないな……」

映司「そうだね」

美波「……お手並み拝見ね」

明久「姫路さんって優しいね」

瑞希「そ、そんな……」

明久「今だから言うけど、僕、姫路さんのことが好き」

幸太郎「明久。今振られると弁当の話しなくなるよ」

明久「にしたいと思ってました」

雄二「さて、話しがかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」秀吉「雄二。一つ気になったんじやが、どうしてDクラスなんじや？」

ワタル「そういえば、そうですね。どうしてですか？」

雄二「色々と理由はあるんだが、主力メンバーがこれだけいけばEクラスとはやりあうまでもない相手だからな」

明久「それも、そうか」

アंक「待て……それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいのか？」

映司「そうだよね…。自己紹介の時、あれだけのことがあれば、Dクラスも攻め落とす必要はないと思うんだけど…」

明久「だったら、最初からAクラスに挑もうよ」

幸太郎「分かった…Dクラスを倒して、今後の景気づけにするつもりでしょ？」

雄二「流石だ。その通りだ。」

美波「でも、Dクラスに勝てなかったら意味がないわよ」

雄二「負けるワケないさ。いいか、お前ら。ウチのクラスは最強だ」

弦太朗「へっ、なんだか面白くなってきたぜ！」

幸太郎「Aクラスの連中をギャフンと言わせてやるか」

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

午後、Fクラス対Dクラスの試召戦争が開戦された。生徒たちは召喚獣を駆使して戦っている光景が広がっている……

弦太朗「どうすりゃいいんだー!!!」

如月弦太朗は召喚獣の出し方が分からず折角捕まえた物理の先生と対戦相手の生徒は苛立っていた

「早く召喚獣の召喚を行ってください」

弦太朗「だからどうやってやればいいんだよ！」

「君の好きなポーズを取って、大きな声で「サモン！」と叫べばいいんだ」

弦太朗「よし！分かったぜ！えーと、ポーズは……」

「あのさあ、早くしてくんない？」

「そうそう。大体最下位のFクラスと戦うなんて時間の無駄だな」

弦太朗「なんだと…！」

「そもそも最下位のクラスがDクラスは愚かEクラスにも勝てないんじゃないのか？」

ギャハハハハと、笑うDクラスの二人。だが、馬鹿にされたことにより弦太朗はプツンとキレる。

弦太朗「ふざけんなよ…！ちよつと勉強ができないぐらいでなんでそこまで言えるんだよ…！」

「ちよつとじゃなくて、“かなり”だろ？」

ギャハハハハと、再び笑い出す。

弦太朗「もう許さねえ…！物理で勝負されたことを後悔させてやるよ！」

「ああ？それはこっちのセリフ…」

弦太朗「試験召喚獣召喚、サモン！」

弦太朗は仮面ライダーフォーゼへの変身ポーズを取り右手を開いて高くあげる。すると、魔法陣から弦太朗の召喚獣“デフォルメの仮面ライダーフォーゼ”が現れて、頭の上に点数が表示された。

Fクラス 如月弦太朗 VS Dクラス 中村友樹 & 金沢啓太

物理 722点 VS 78点 & 82点

「な、なんだあの点数は！」

「バカな、あいつ本当にFクラスの不良か！？」

弦太朗「ロケット・オン！」「ロケット・オン」くらええええ！」

デフォルメフォーゼのロケット突撃パンチが二体の召喚獣を補習室送りにした。

Fクラス 如月弦太朗 VS Dクラス 中村友樹 & 金沢啓太

物理 712点 VS 0点 & 0点

「バカなあああ…！」

西村「戦死者は補習…！」

弦太朗「いよっしゃー！やったぜ！さ、Dクラス代表の首を貰いにいくか！」

その後弦太朗は、数学勝負を仕掛けられ、補習室送りにされた……

⋮
○

第4話 キーワードは「変身!」ではなく、「試獣召喚っ!」(サモンっ!)

明久「次回、「第5話乗り越えろ!女の恐怖!」に、
バカテスオールキャラ『『『スイッチ・オン!』』』

第5話 乗り越えろ！女の恐怖！（前書き）

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

如月弦太郎の答え

『粒子』

教師のコメント

正解ですけど、君は本当に不良ですか？

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

左翔太郎の答え

『波は闇であり、二つが混じりいずれはどちらかが勝つの』

教師のコメント

吉井くんと一緒にRPGのゲームができてしまいましたが、いつか先生にプレイさせてください。

第5話 乗り越える！女の恐怖！

弦太郎が補習室送りにされた時、小野寺ユウスケ、左翔太郎、火野映司はDクラスの光夏海、鳴海亜樹子、泉比奈と鉢合わせした。

「映司くんたちには悪いけど、代表の平賀くんはやらせない！」

「ユウスケ、覚悟してください！」

「翔太郎くんも、補習室送りにしてやるんだから！」

「サモン！」

Dクラスの三人は召喚獣を召喚する。

「こうなったら、やるっきゃない！」

「ああ、逃げるだなんてカッコ悪い真似はできねえしな」

「やるしかないか…！」
「サモン！」
「ユウスケ、翔太郎、映司の三人も召喚する。」

Fクラス 小野寺ユウスケ vs Dクラス 光夏海

日本史 35点 vs 83点

Fクラス 左翔太郎 vs Dクラス 鳴海亜樹子

日本史 42点 vs 75点

Fクラス 火野映司 vs Dクラス 泉比奈

日本史 81点 vs 127点

「なにこの、ドングリの背比べ…」

「一緒にしないでよね！アタシ達Dクラスなんだから！」

「そこまで胸はって自慢することじゃありませんよ…」

「翔太郎さん！時代劇ものに興味あるならもうちょっと頑張ってくださいよ！」

「ユウスケこそ、その点数はねえだろ！」

「なんでもいいからはじめない…？」

「くっ！点数が低いと全然当たらない…！こうなったら！」

ユウスケは狙い撃ちから乱れ撃ちに換えた。そのおかげで、壁や窓

ガラスに穴が空いた。因みに、弾丸は一発も命中しなかった。

「どこを狙ってるんですか、ユウスケ!?」

「あ、あれ?一発ぐらい当たるかと…(グサツ)ギャアアア!」
キバーラのサーベルを頭に突き刺されたユウスケ。

Fクラス 小野寺ユウスケ vs Dクラス 光夏海

日本史 0点 vs 83点

「小野寺、補習だー!」

「いやだあああ!」

一方こちらでは、翔太郎と亜樹子が戦っていた

「ユウスケくんは補習室送りみたいだよ?いい加減あきらめたらどう?翔太郎くん」

「くそっ!なんだよお前の武器ただのでっかいスリッパかと思ったら、盾としても優秀じゃねえか!」

「(ピクツ)今なんてゆうたん…?」

「ああ?ただのでっかいスリッパって…」

「ただのでっかいスリッパやおお!」

「ま、まて亜樹子、悪かった、悪かったてえええ!」
ジョーカーは巨大スリッパの餌食となった。

Fクラス 左翔太郎 vs Dクラス 鳴海亜樹子

日本史 0点 vs 72点

「まずいな…二人共補習室送りにされたか…!」

「もう映司くん一人だけだよ。…最も簡単に引いてくれないと思うけど」

「くっ…!こうなったら…コンボチェンジ・サゴーズ!」

「サイ!ゴリラ!ゾウ!サツゴーズ、サツゴーズ!」

Fクラス 火野映司 vs Dクラス 泉比奈

日本史 71点 vs 127点

「やっぱり…防御重視のサゴーズにチェンジしたね…でも!」

「比奈さん、加勢します！」

「アタシも協力するわ！」

Fクラス 火野映司 vs Dクラス 泉比奈 & 光夏海 &

鳴海亜樹子

日本史 71点 vs 127点 & 83点 & 72点

「加勢して点数を上げたとしても、防いで一気に反撃にでてやる！」

「いくよみんな！」

「ハアアアア！」

「ウオオオオ！」

Fクラス 火野映司 vs Dクラス 泉比奈 & 光夏海 &

鳴海亜樹子

日本史 0点 vs 127点 & 83点 & 72点

「勝てるわけないじゃん……by映司」

古典

Fクラス 姫路瑞希

339点

vs

Dクラス 平賀源二

129点

「え？あ、あれ？」

「ご、ごめんなさいっ」

Dクラス代表 平賀源二 討ち死に

「うおおーっ！」

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。喜ぶ明久・美波・秀吉・康太とシンジ・カズマ・アスム・幸太郎・ワタルとモブ…のことはどうでもいい。

「ひでえ！」

「ラブコール送るからそういうことになる…」

幸太郎、ナイスフォロー。

しかし、喜べないメンバーと言えば、補習室送りにされた、弦太朗、ユウスケ、翔太郎、映司の四人だった。

「そう…良かったね」

「そんなにヤバかったのか…？」

「アंकも体験してみればわかるよ…現に弦太朗くんを見てみなよ…」

そう言われると、弦太朗の方を向くと、頭に包帯まいて頬に絆創膏が貼られていて松葉杖を使っている弦太朗がいた。

「いや、何があつたホントにー！？」

FクラスとDクラスの思いが声と一緒に…。

雄二の話によると、Dクラスとの設備交換は行わないことにした。その代わり、Dクラスは雄二の指示でBクラスの室外機を壊して欲しいという条件で、交渉は成立した。

「でもなんでまた…」

「次のBクラス戦の作戦に必要ならしいよ」

疑問に思うカズマに聞いたシンジが答える。

「室外機を壊すことに何の意味が…」

「それも、そのうち分かるだろ…」

疑問に思うワタルに試召戦争で疲れた幸太郎がめんどくさそうに答える。

「そういえば、明日はテストですよね」

思い出したかのようにアスムがいう。

「ああ、明日点をとつとかなないと次は厳しいな……」

Aクラス並みの学力の幸太郎が言う。それもそのはず、次回はBクラス戦だ。シンジの情報によると、Bクラス代表根本恭二は、勝つためには手段を選ばない卑怯者だと言うのだ……。尚更今回のDクラス戦よりも苦戦するのは、確実だ。とにかく、得意科目以外の点数を上げることが彼らの課題であり、それが明日のテストで決まるのだ……

翌日、午前中の四教科が終わり、昼ご飯にしようとして立ち上がる明久たち。しかし、今日は瑞希がお弁当を作ったというので、全員屋上へ行った。

現在、目の前に広がる屋上の光景には、Fクラス代表坂本雄二が倒れていた……。なぜこうなったかと言うと、原因は、瑞希の手料理だった。瑞希は料理が下手。恐る恐る幸太郎が聞いた所とんでもない材料が含まれており、化学ができる生徒ならばすぐにでも、口に含んではいけないと分かった……。ユウスケは上手く美波に説明して、料理を食べさせないようにした。メインディッシュだけでなく、デザートまで用意していた瑞希。スプーンを忘れたと言うので、彼女は今教室に戻った。

「そういえばユウスケ……確か瑞希さんの料理が食べたかった……」

「ちよつとまって！まずいだなんて聞いてないよ！」

「幸太郎くん！君の不幸体質が裏をかいてきつと生還できるはず！」

「無理いうなよ！」

「こうなったら俺がいつてやるぜ！」

「無事に帰ってきてください」

「ここはワシがいくかのう……」

「頑張つて秀吉！」

結局、昨日余計なこと（死亡フラグ）を言った（立てた）ユウスケと、不幸体質挽回のために食す幸太郎と、勇気ある不良如月弦太郎と、自称ジャガイモの芽をたべても頑丈な鉄の胃袋をもつ秀吉が、メインディッシュの残りとデザートを食べることになった…。

数分後、ユウスケ、弦太郎、秀吉の三人は保健室に運ばれたが……

幸太郎“だけ”病院に搬送された……

第5話 乗り越える！女の恐怖！（後書き）

明久「次回、「第6話見つけだせ！対Bクラス必勝法！」に、
士&海東「スイッチ・オン！」」

幸太郎、安定の不幸体質。挽回は夢のまた夢で終わりそう…
幸太郎「orz」

第6話 見つけだせ！対Bクラス必勝法！

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん。相手はBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

美波の疑問に雄二が答える

「なぜBクラスだ。俺たちの目標はAクラスのはずだ」

アングが雄二に問う

「正直に言おう」

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスにかてやしない」

戦う前から降伏宣言する雄二。

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さつきと言ってることが違うじゃないか」

「はつきり言うが、俺たちのクラスは、主力メンバー以外のモブは

役に立たない」

「え？」

雄二の発言に驚愕する明久

「Dクラス戦の時に様子を見てみたが、モブどもは主力メンバーに

頼りすぎていることが分かったんだ」

「な、なんだよそれ！それじゃあ、わざわざDクラス上位の三人と

戦って補習室送りにされた俺たちはどうなんだよ！」

「ぶつちやけお前たち三人が補習室送りにされたとき、期待はずれ

のような面をしてたな…」

「…ふざけんなー！」「…」

ユウスケの疑問に雄二が答えると補習室送りにされた四人は、当然

の如く怒った。

「落ち着け。ちゃんとモブどもにも戦うよう説得はしてやるから」

「そうか？ だったらいいんだけどよ……」

雄二の提案に納得する弦太朗

「で、結局どうすりわけ……？」

幸太郎が話しを戻す

「Aクラスとは、一騎打ちでやるつもりだ」

「一騎打ちに？ どうやって？」

「Bクラスを使う。設備入れ替えのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

明久と瑞希の疑問に雄二が説明する。

「そうと決まれば、明久。テストが終わったらBクラスに行って宣言戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

雄二の頼みを断る明久。

「それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？ ……OK。乗った」

「よし。負けた方が行く、でいいな？」

明久は雄二に頷いて返す。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいい」

「分かった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

「もしそうするなら俺はお前をブン殴る」

「弦太朗くん、すじが通ってないよ」

ジャンケンに加入した弦太朗にツッコミを入れる映司。

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

「ビビるな明久！チヨキを出せええ！」

雄二 パー

明久 チヨキ

「明久。ブチ殺す…！」

「させるかああ！」

「グフォア！…如月、てめえ…！」

「如月に雄二！喧嘩するでない！」

弦太郎と雄二が喧嘩を始めたが、秀吉が仲裁に入り、なんとか止める。

結局、明久と弦太郎が行き、Bクラスをシバいてきたため、やはり二人は無傷だ。

開戦は明日の午後。主力メンバーは家に帰ってテスト勉強をすることにした……

第6話 見つけだせ！対Bクラス必勝法！（後書き）

明久「次回、「第7話 打ち砕け！Bクラスの野望！前編」に、
タクミ「スイッチ・オン！」

第7話 打ち砕け！Bクラスの野望！前編

キンコンカーンカーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。Fクラス対Bクラスの試召戦争が開始された。

雄二「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエツサー！』

カズマ「いた、Bクラスだ！」

シンジ「高橋先生をつれてきているのか…？」

弦太郎「向こうは総合科目で勝負するつもりか…！」

翔太郎「だったら、俺たちは一教科だけずば抜けてるのがあるからな…いくぜ！」

「」「サモン！」「」

総合

Fクラス 左翔太郎

1947点

V S

Bクラス 野中長男

1943点

「な、何だこの点数ホントにFクラスか!？」

翔太郎「ああ…本当さ…マキシマムドライブ！」

『マキシマムドライブ!』

翔太郎「ライダーパンチ…！」

「ぐあああ!」

総合

Fクラス 左翔太郎

1937点

V S

Bクラス 野中長男

0点

翔太郎「ふっ…決まったな」

数学

Fクラス 剣立カズマ

658点

V S

Bクラス 金田一祐子

159点

「な、何よこの点数差！」

カズマ「ゴメン！これも戦争だから！」

数学

Fクラス 剣立カズマ

658点

V S

Bクラス 金田一祐子

0点

物理

Fクラス 如月弦太郎

749点

V S

Bクラス 里井真由子

152点

「ちよっ…！…！…！こんな勝てるわけ…！」

「もらったあああ！」

物理

Fクラス 如月弦太郎

749点

V S

Bクラス 里井真由子

0点

弦太郎「しゃあっ！」

得意科目で快進撃を見せ付ける弦太郎たち。だが、それには分けが
あつた：

弦太郎たちの作戦は自分たちの得意科目の担当の先生を早くつかま
えて、一気に攻めるシンプルなものだが、Bクラスに奪われたら最
後：彼らは補習室送り決定だ。

秀吉「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

明久「ん？なんで？」

秀吉「Bクラスの代表じゃが…」

明久「根本恭二のこと？」

秀吉「うむ」

明久「……なるほど。戻っておいたほうが良さそうだね」

秀吉「雄二に何かがあるとは思えんが、念のための」

明久「分かったよ。姫路さんと弦太郎くんたちに一言言っておくよ」

明久「……うわ、こりゃ酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

明久「卑怯、だね」

教室に戻った明久たちの目の前に広がる光景は、穴だらけの卓袱台

と壊れたシャーペンや消しゴムがあった。

弦太郎「なんてことしゃがる…！これじゃあ補給は無理じゃねえか…！」

映司「…：…やられたね、Bクラスの根本くんたちに…」

ワタル「器の小さい人ですね。」

雄二「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

明久「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているの気づかなかったの？」

雄二「協定を結びたいという申し出があったからな」

アंक「協定だと…？」

雄二「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

ユウスケ「それ、承諾したの？」

雄二「そうだ」

美波「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

雄二「姫路以外は、な」

美波「あ、そっか…」

雄二「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日だ」

映司「そうだね。」

アंक「この調子じゃ本丸は落とせそうにないしな」

雄二「その時はクラス全体よりも姫路個人の方が重要になる」

アスム「だから受けたんですか？」

雄二「そういうことだ。この協定は俺たちに取ってかなり都合が良
い」

秀吉「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい」

明久「ん。雄二、あとよろしく」

雄二「おう。シャーペンや消しゴムの手配をしておこう」

シンジ「なんか、まだまだ色々やってきそうだな」

カズマ「そうだね。この程度で終わると思えないしな……」

カズマ「じゃあ、シンジ気をつけてね！」

シンジ「ああ、カズマもね！」

「辰巳！戻ってきたか！」

シンジ「ごめん、それより戦況は？」

「まずいことになっている」

シンジ「え？どうして!？」

「島田が人質にとられた」

シンジ「何だつて………?」

第7話 打ち砕け！Bクラスの野望！前編（後書き）

明久「次回、「第8話 打ち砕け！Bクラスの野望！中編」に、
フリリツプ「スイッチ・オン……」

第8話 打ち砕け！Bクラスの野望！中編（前書き）

バカテスト 英語

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希&左翔太郎の答え

『good better best

bad worse worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good gooder goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾にerやestをつける
だけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太&如月弦太郎の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』 『乳製品』 『胸』

剣立カズマの答え

『I'm sorry』

教師のコメント

分からなかったとは言え、誤る必要はないですよ。

第8話 打ち砕け！Bクラスの野望！中編

シンジ「美波ちゃん！」

美波「た、辰巳！」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

シンジ「くっ…！卑怯な真似を…！」

シンジは、どうやって美波を助けるか考え、そこである作戦を思いつく。

シンジ「それなら、美波ちゃんを解放して代わりに俺を人質にしろ！」

美波「えっ…！」

「ほう。ま、ぶっちやけコイツよりもアイツの方を捕まえれば戦力は大幅に減るしな…いいだろう」

美波が解放されて、すれ違い様にシンジが呟く

シンジ「（俺に任せといて）」

美波「えっ…？」

「ようし、来たか…！」

シンジ「ありがとう…！」

「はあ？」

シンジ「現代社会で来てくれて…サモン！」

現代社会

Fクラス 辰巳シンジ

473点

V S

Bクラス 鈴木二郎

33点

&

Bクラス 吉田卓夫

18点

『サバイブ』

シンジの魔法陣からは、普段とは違う召喚獣が現れた

「なんだあの召喚獣！あんな青かったか！？」

シンジ「進化したのさ…規定の点数を越えたからね！」

シンジの召喚獣は規定の点数を越えると召喚獣が「仮面ライダーナ

イトサバイブ」に、進化するのだ

シンジ「はあああ！」

「ぎゃあああー！」

シンジのナイトサバイブはダークバイザーツヴァイのソードでBクラスの二体の召喚獣を切り裂き、二人を補習室送りにした

シンジ「ふう…なんとかなったか…」

美波「あ、あの辰巳」

シンジ「ん？なに？」

美波「そ、その…さっきは、ありがとう／＼／」

シンジ「どうかしたの？熱？」

美波「な、なんでもないわよ！／＼／」

シンジ「？」

その後、タイムオーバーにより、現在協定通りに休戦中である。

明久「戦況は？」

雄二「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害

も少なくはないがな」

康太「……（トントン）」

雄二「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

雄二「何？Cクラスの様子が怪しいだど？」

康太「……（コクリ）」

雄二「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

明久「雄二、どうするの？」

雄二「んー、そうだなー」

ちらりと時計を見ると、四時半だった

雄二「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言つて脅してやればいいだろ」

明久「それに、僕らが勝つなんて思つてないだろうしね」

映司「ちよつと待つて」

雄二「ん？なんだ、火野？」

映司「確か、明日の再戦時刻まで試召戦争に関わることは一切禁止するつて、協定で結ばれてたじゃないか」

雄二「大丈夫だ、バレやしない」

幸太郎「……なんか、嫌な予感がするな…俺も付いていっていいか？」

カズマ「あ、それなら俺も」

シンジ「俺もいくよ」

結果、明久、雄二、瑞希、ムッツリーニ、美波、幸太郎、カズマ、シンジのメンバーでCクラスに向かう。途中で、須川もいたので連れていくことにした。

（Cクラス教室）

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

小山「私だけど、何か用かしら？」

雄二「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

小山「クラス間交渉？ふうん……」

雄二「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本くん？」

シンジ「え？」

カズマ「根本って……」

幸太郎「まさか……！」

根本「当然却下。だって、必要ないだろ？」

明久「なっ！？根本くん！ Bクラス代表の君がどうしてここに！」

根本「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を禁止したよな？」

明久「何を言って……」

根本「先に協定を破ったのはそっちだからな？ これはお互い様、だよな！」

「長谷川先生！ Bクラス芳野が召喚を……」

須川「させるか！ Fクラス須川が受けて立つ！ サモン！」

カズマ「ふざけるな、根本！ 協定違反とは言え、お前たちもCクラスと手を組むなんて！ クラスは一對一のはずだ！」

シンジ「それに俺たちが来る前にCクラスの教室にいるなんて、どう考えてもおかしい！ お前こそ、あらかじめCクラスにわざと怪しい動きを見せて、俺たちをはめたんじゃないのか！」

雄二「無駄だ剣立、辰巳！ 根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている！」

根本「ま、そゆこと……」

明久「へ理屈だ！」

根本「へ理屈も立派な理屈の内つてな」

雄二「明久、ここは逃げた方がいい！」

明久「くそっ！」

根本「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

雄二「そいつはどうか？」

根本「なに…!？」

すると突然召喚フィールドがガラスが割れたような音を出して消滅した。

根本「召喚フィールドが消えた!?どうなってやがる！」

雄二「悪いな、うちには相手が優勢な召喚フィールドだけをブレイクすることができる奴がいるんでな。須川だけ召喚させたのはその意味だ」

根本「な、なんだと！」

〈Fクラス教室〉

ワタル「悪い予感が当たりましたよ。やっぱり向こうの罠でしたか…」

秀吉「うむ。…すまぬ高橋教諭呼び出してしまつて」

高橋「では、召喚フィールドを閉じてもよろしいでしょうか？」

ワタル「はい、ありがとうございました」

高橋先生は、召喚フィールドを閉じて、職員室に向かった。

〈再びFクラス教室〉

カズマ「くそっ！ 根本の奴…！」

シンジ「カズマ…この際怒つてたつてしょうがないよ…」

弦太郎「根本め…なんて卑怯な野郎だ！」

雄二「すまない、皆。特に火野、お前の言うことに従っていれば…」

映司「もういいよ…。頭を上げて坂本くん。こうなつた以上Cクラスともやるしかないし…」

アंक「映司の言う通りだ。だが、やっぱりFクラスにとつちや厳しいがな…」

幸太郎「根本の作戦が読めた…。きっとアイツは俺達が試召戦争を行っている間にCクラスに協力させてワザと怪しい動きを俺達に見せて罠にかかるのを待ってたんだ」

アスム「え？でも、協定を結んでる間は…」

ワタル「考えてくださいアスム。協定の内容は「タイムオーバーした後、試召戦争に関する行為を一切禁止する」と言ったのです。つまり根本は、僕らが試召戦争をしてる間に協力させたんですから、結果的にはノーカンなんですよ」

雄二「ワタルの言う通りだ。確かに協定には試召戦争を終えた後に
関する行為を禁止すると言ったからな。試召戦争の最中なら、協定
違反はしていないからな。」

翔太郎「ちっ、分かっても何か納得がいかねえ…！」

雄二「怒ってても、何の意味もない。Cクラスまで敵になった以上、
同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦
の直後にCクラス戦はきつい」

明久「それならどうしようか？ このままじゃ勝ってもCクラスの
餌食だよ？」

秀吉「そうじゃな…」

雄二「心配するな。向こうがそうくるなら、こっちにだって考えが
ある」

明久「考え？」

雄二「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はそれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しになった。

第8話 打ち砕け！Bクラスの野望！中編（後書き）

明久「次回、「第9話 打ち砕け！Bクラスの野望！後編」に、
照井「スイッチ・オン！ さあ、振り切るぜ！」

シンジにまさかのフラグが立ちました……

第9話 打ち砕け！Bクラスの野望！後編

雄二「昨日言っていた作戦を実行する」

明久「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦時刻は九時だ。

雄二「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

明久「あ、なるほど。それで何をすんの？」

雄二「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言つて雄二が鞆から取り出したのは文月学園の女子制服だった。

秀吉「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

雄二「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

雄二「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

秀吉「う、うむ……」

秀吉は制服に着替えた後、明久と雄二と共にCクラスへ向かった

（Cクラス教室）

秀吉「静かになさい、この薄汚いゴミども！」

小山「な、何よアンタ！」

秀吉「話しかけないで！ゴミ臭いわ！」

小山「アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数が良いからって

いい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！」

秀吉「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるのが我慢な

らないの！ 貴方達なんてゴミ箱で充分だわ！」

小山「なっ！ 言つに事欠いて私達にはゴミ箱がお似合いですって

！？」

秀吉「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達

を相応しい教室に送ってあげようと思うの』

秀吉『最も、戦闘力たったの5のCクラス（ゴミ）農家のおじさん）が、戦闘力1500のAクラス（ラディッ○）に勝とうだなんて寝言は言わないことね。むしろ聞くだけ無駄だわ』

秀吉「これで良かったかのう？」

雄二「ああ。素晴らしい仕事だった」

明久「でも、さすがにドラゴンボール○のネタが流れた時はちょっとテンパったけどね」

秀吉「明久よ…伏せ字しきれておれんぞ…」

明久「え？」

午前九時。Bクラス戦が開始された。FクラスはBクラス前から進軍を開始した。雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』とのことだった。

明久「姫路さん、左側に援護を！」

瑞希「あ、そ、そのっ……！」

瑞希は泣きそうな顔をしてオロオロしており、戦線に加わっていなかった。

明久「ま、まずい！突破される！」

弦太郎「うおおお！」

幸太郎「ハアアア！」

「ぐわあああ！」

明久「先生、ツラ…ずれてますよ」

竹中「少々席を外します！」

明久「姫路さん、どうかしたの？」

瑞希「そ、その、なんでもないですっ」

弦太郎「なんでもないはずがないだろ…！」

幸太郎「何かあったなら話して欲しいんだ。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし…」

瑞希「ほ、本当になんでもないんです！」

弦太郎「けどよ！」

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

瑞希「私が行きますっ！」

そう言つて瑞希が戦線に加わろうと駆け出したが…

瑞希「あ……………」

急にその動きを止めてうつむいてしまう。何かを見て動きを止めてしまったらしく、三人は瑞希が見ていた方を目で追うと…………腕を組んでこちらを見下す卑怯者 根本恭二の姿があつた

弦太郎「あいつは…………！」

明久「根本くんがどうかしたのかな…？」

幸太郎「ん？あれって確か……………」

三人が見た物は、3日前に瑞希が書いていた、

ラブレターだつた……………

第9話 打ち砕け！Bクラスの野望！後編（後書き）

明久「次回、「第10話 打ち砕け！Bクラスの野望！怒りの反撃編」に、」

後藤「スイッチ・オン！」

第10話 打ち砕け！Bクラスの野望！怒りの反撃編（前書き）

バカテスト 保健体育

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希&土屋康太の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

如月弦太郎の答え

『16歳』

教師のコメント

君が言ってるのは、女性が結婚できる年です。

第10話 打ち砕け！Bクラスの野望！怒りの反撃編

明久「……なるほどね。そういうことが」

幸太郎「昨日の協定の話しを聞いた時からおかしいと思っていただよ。アイツ（根本）が、そんな対等な条件の提案をしてくるなんてさ……。結局あの時点で既に瑞希を無力化する算段が立っていたわけか。」

弦太郎「それならあの協定だつてうなずける。瑞希が参加できないのなら、あの協定はBクラスが圧倒的に有利な条件だしな……」

明久「上手い方法だよ。合理的で失うものもリスクもない。」

明久「姫路さん」

瑞希「は、はい……？」

明久「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

瑞希「……はい」

弦太郎「じゃ、俺達は用があるから行くぜ」

瑞希「あ……！」

明久「面白いことしてくれるじゃないか、クズ野郎（根本）のクセに」

明久&弦太郎&幸太郎「……あの野郎、ブチ殺す！」

〈Fクラス教室〉

明久「雄二っ！」

雄二「うん？どうした明久。それに、如月に野上も」

明久「話があるんだ」

雄二「…とりあえず、聞こうか」

明久「もし、この戦いで勝ったら根本くんの制服を回収して欲しいんだ…。ちょっと盗られたものを奪い返したいんだ」

雄二「相当な分けありだな…。いいだろう。で、それだけか？」

明久「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

雄二「さっきのと何か関係があるのか？」

明久「それは言えない。」

幸太郎「どうしても外して欲しいんだ…！」

弦太郎「頼む、雄二！この通りだ！」

雄二「……条件がある」

明久「条件？」

雄二「姫路が担う予定だった役割をお前たちがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

弦太郎「ああ、任せろ！」

幸太郎「必ず成功させるさ…！」

明久「それで、僕は何をしたらいい？」

雄二「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい」

明久「皆のフォローは？」

雄二「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

明久「……難しいことを言ってくれるね」

幸太郎「もし、失敗したら？」

雄二「失敗するな。必ず成功させる」

弦太郎「へっ、そりゃそうか」

雄二「それじゃ、上手くやれよ」

明久「え？ どこか行くの？」

雄二「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

幸太郎「それって、室外機の事？」

雄二「ああ。」

雄二「明久」

雄二「確かに点数は低いが、秀吉やムツリー二のように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

明久「……雄二」

雄二「上手くやれ。計画に変更はない」

弦太郎「それじゃあ明久、お前の方はお前のやり方に任せるぜ」

明久「うん。弦太郎くんも幸太郎くんも頼んだよ」

幸太郎「ああ、任せろ」

明久は美波たちと共にDクラスの教室に向かった。

弦太郎「さあて、俺達も……」

幸太郎「やるか……」

Dクラスの教室にて、

明久は召還獣を召還して、自身の召還獣で壁を殴り続けていた。

明久「はあっ！ んのおっ！ つう……っ！」
美波「アキ、時間がないわ、急いで！」

根本「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

弦太郎「どうしたんだよ？ Bクラスの代表さんはそろそろギブアップか？」

根本「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？」

幸太郎「どうだか……」

雄二「無用な心配だな」

根本「そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

雄二「……お前から相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

根本「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

雄二「負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

明久「はああっ！」

根本「……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっっているのか？」

雄二「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

根本「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

雄二「……態勢を立て直す！ 一旦さがるぞ！（如月、野上…頼んだぞ！）」

根本「どうした、散々ふかしておきながら二人だけ残して逃げるのか！」

美波「アキ、そろそろよ」
明久「うん。わかってる。……次できめる！」

明久「おおおおおつ！」

明久は腹の底から力を込めて雄叫びをあげる。

雄二『あとは任せたぞ、明久』

午後三時ジャスト。怒りの反撃作戦が開始された。

明久「だぁーっしゅぁーっ！」

ドゴオツ！

根本「んなっ！？」

明久「くたばれ、根本恭二いーっ！」

美波「遠藤先生！ Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！サモン！」

明久「くっ！ 近衛部隊か！」

根本「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲はしっぱ」

弦太郎&幸太郎「お前ら（近衛部隊）、邪魔だーっ！」
「うわぁぁぁ！」

弦太郎の召還獣フォーゼと幸太郎の召還獣NEW電王が、近衛部隊を蹴散らす。

根本「なっ……！」

根本の後ろには、涼しい風が入るように窓が開けられていた。窓か

ら保健体育の先生とムツツリー二が教室に足を踏み入れる

康太「……Fクラス、土屋康太」

根本「き、キサマら……！」

康太「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

明久「同じく、吉井明久！」

弦太郎「同じく、如月弦太郎！」

幸太郎「同じく、野上幸太郎！」

康太「サモン」

保健体育

Fクラス 土屋康太

441点 &

吉井明久

83点 &

野上幸太郎

276点 &

如月弦太郎

63点

VS

Bクラス 根本恭二

203点

『リミットブレイク』

『フルチャージ』

弦太郎「怒りのロケットドリルキック！」

明久&幸太郎「うおおお！」

根本「ぐわあああつ！」

今ここに、Bクラス戦はFクラスの勝利で終結した。

第10話 打ち砕け！Bクラスの野望！怒りの反撃編（後書き）

明久「次回、「第11話 卑怯者には神と悪魔と怒りの鉄槌を！」に、」

賢吾「スイッチ、オン！」

ユーザー名変更しました。これからはネガ・ナハトです。よろしく
お願いします！

第11話 卑怯者には 神と悪魔と怒りの鉄槌を！（前書き）

バカテスト 生物

問 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希&アングの答え

『？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？ミネラル』

教師のコメント

さすがです。アング君は生物は特に優れていますね。

吉井明久の答え

『？砂糖？塩？水道水？雨水？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

火野映司の答え

『？明日のパンツ？今日のパンツ？昨日のパンツ？一昨日のパンツ

？ちよつとの小銭』

教師のコメント

君は人生をなめているんですか。あと、明後日のパンツは君にとって無くてもいいものなんですか？

第11話 卑怯者には 神と悪魔と怒りの鉄槌を！

〈Bクラス教室〉

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

根本「……………」

アスム「さっきまでの強気が嘘みたいですね」

アंक「はっ、いい気味だ…！」

雄二「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

ざわざわ…

雄二「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。

ここがゴールじゃない」

映司「まあ、確かにねえ…」

雄二「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

根本「……………条件はなんだ」

雄二「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

雄二「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

雄二「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本「……それだけでいいのか？」

雄二「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、秀吉が着ていた女子の制服だつた。

根本「ば、馬鹿なことを言つな！ この俺がそんなふざけたことを

……！」

『Bクラス全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るなら、やらない手はないな！』

Fクラスライダー「……あ、俺（僕）達も手伝つよ」「」

ユウスケ「あ、いけね手が滑つた。」

バキッ！

根本「グフォア！」

シンジ「あ、俺も」

バキッ！

カズマ「俺も」

バキッ！

幸太郎「俺は足が滑つた」

ゲシッ！

ワタル「あ、すいません、顔蹴っちゃいました」

ゲシッ！

翔太郎「わりい、クズ（根本）」ゲシッ！

映司「あ、ごめん脇腹蹴っちゃった」

ゲシッ！

アंक「……………うざい」

ゲシッ！

弦太郎「あ、わりい○玉蹴っちまった」

チーン！

根本「いい加減にしろお前ら！謝つといて、ワザと殴ったり蹴ったりしてんじゃねえよ！あと、役二名本音ぶちかましてんじゃねえよ！」

全員「……………うるさい……………」

バキッ！

根本「バタンツ」

明久「よし、後よろしくね」

幸太郎「明久」

弦太郎「手紙はどうした？」

明久「ちゃんと返したよ。」

弦太郎「そうか……………」

明久「……………ありがとう」

幸太郎「え？」

明久「一緒に根本を倒すのに協力してくれて」

弦太郎「なんだ、そんなことか」

明久「え？」

幸太郎「あんなの、人として当然だろ？」

弦太郎「そうそう。あんなの前にして落ち着いていられる奴はいねえだろ……………」

明久「幸太郎くん……………弦太郎くん……………本当にありがとう」

幸太郎と弦太朗は小さく笑い、明久に笑顔を見せ、明久も同じことをした……………

幸太郎「ところで弦太朗」

弦太朗「あん？」

幸太郎「ああは言っても、いずれは友達になるんだろ？」

弦太朗「ああ、BクラスもCクラスも明日から友達だ！」

幸太郎「……………根本は？」

弦太朗「卒業式の時に友達になる！」

第11話 卑怯者には 神と悪魔と怒りの鉄槌を！（後書き）

明久「次回、「第12話 決戦！Aクラス戦！交渉編」に、
ユウキ「スイッチオン！」

第12話 決戦！Aクラス戦！交渉編

（Fクラス教室）

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃねえんだーっ！」

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

映司「え？誰と？」

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ」

幸太郎「翔子って、Aクラス代表の霧島翔子のことか…」

アंक「お前が勝つことができるのか…？」

雄二「まあ、アंकが言うとおり確かに翔子は強い。まともなやりあえば勝ち目はないかもしれない」

雄二「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？

まともなやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

雄二「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

雄二「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおーっ!!』

「Aクラス教室というか教室と言えるのかこの部屋」

優子「一騎討ち?」

雄二「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二を筆頭に、Fクラス主力メンバー全員でAクラスに来ていた。

優子「うーん、何が狙いなの?」

雄二「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子「うーん……わかったよ。何を企んでいるか知らないけど、その提案受けるよ」

明久「え? 本当?」

優子「でも、こちらからも提案。代表同士だけでなく、お互い五人ずつ」

士「いや、お互い八人ずつだ」

優子「門矢くん? それに、照井くん、後藤くんも……」

士「木下。ここからは、俺達が決めさせてもらうぞ」

優子「え？ うーん……しょうがなあ、ちょっと聞いてあげてもいい？」

雄二「ああ。いいだろう」

士「お互い八人と言ったが、メンバーは、木下・佐藤・工藤・久保・俺・照井・後藤・霧島の、八人で行く」

ユウスケ「おい、待てよ士！ どうしてメンバーを平気に明かすんだよ！」

士「なに……こちらからメンバーを明かせば、お前たちもメンバーを明かしてもらうからさ」

明久「雄二、どうするの？」

雄二「……そうだな、うちからは、秀吉・如月・ムッツリーニ・姫路・小野寺・左・火野・俺でいこう」

士「そうか。そっちのメンバーは大体分かった」

雄二「ただし、勝負する教科はこちらで決めさせて貰う。そのくらのハンデはあってもいいはずだ」

優子「え？ うーん……」

翔子「……受けてもいい」

優子「うわっ！代表！」

翔子「……雄二の提案を受けてもいい」

優子「あ、あれ？ 代表。いいの？」

翔子「……その代わり、条件がある。」

雄二「条件？」

翔子「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

優子「じゃ、こうしよう？ 勝負内容は八つの内四つそっちに決めさせてあげる。」

雄二「交渉成立だな」

翔子「……勝負はいつ？」

雄二「そうだな。十時からでいいか？」

翔子「……わかった」

雄二「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

明久「そうだね。皆にも報告しなきゃいけないからね」

士「ユウスケ」

ユウスケ「なんだ、士」

士「……面白いものが、見られそうだなぞ」

ユウスケ「え……？」

士「まあ、楽しみにしている」

ワタル「ユウスケ、士さんと何を話してたんですか？」

ユウスケ「いや、面白いものが見られるって……」

アスム「面白いもの、ですか？」

ユウスケ「ああ……」

シンジ「それよりもさあ、どうして俺達この世界に来た時本来とは異なるライダーになってるんだらうな……」

カズマ「俺も思った……。何でなんだろう……」

ユウスケ「（……士の言った、面白いものとの関係があるのかなあ？）」

ユウスケは考え事をしていながらも、Aクラス戦は迫っていた……。

第12話 決戦！Aクラス戦！交渉編（後書き）

明久「次回、「第13話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー対戦編 前編」に、スイッチ・オン！」

第13話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 前編

「Aクラス教室という名のすつげえ豪華な部屋」
高橋「では、両名共準備は良いですか？」

雄二「ああ」

翔子「……問題ない」

高橋「それでは一人目の方、どうぞ」

優子「アタシから行くよっ」

秀吉「ワシがやるっ」

Aクラスの一人目は、
木下優子。対するFクラスは木下秀吉。秀吉はなぜか、アタッシュ
ケースを持っていた。

ワタル「ユウスケ、気になるんですか」

ユウスケ「ああ…、士の言った「面白いもの」。一体何のことなん
だ…？」

カズマ「それよりも、秀吉が持っているケース。どこかで見たこと
がある気が…」

シンジ「あれっ？ あれって確か…」

優子「ところでさ、秀吉」

秀吉「なんじゃ？ 姉上」

優子「Cクラスの小山さんって知ってる？」

秀吉「はて、誰じゃ？」

優子「じゃーいいや。だったら、力づくでも白状させてあげるわ…！」

すると、優子の腹部に仮面ライダーアギトのベルト……“オルタリング”が、出現する。

ユウスケ「な！？あのベルトは…！」

秀吉「姉上…手加減はせぬぞ」

秀吉はアタツシユケースから、“ファイズギア”と“ファイズフォン”を取り出す

シンジ「やっぱり…、ファイズの…！」

秀吉はベルトを巻き、ファイズフォンに暗証番号『555』を、入力して、ファイズフォンを持った右手を高く上げる。

そして、優子と秀吉は、変身のキーワードを同時に叫んだ

秀吉&優子「変身！」

優子はオルタリングの両サイドを押し、秀吉はファイズフォンをベルトに装填させ、召還フィールドに、『仮面ライダーアギト』と『仮面ライダーファイズ』の二体が誕生する。

ワタル「アギトに…、ファイズ…」

ユウスケ「土！これがお前の言った面白いものなのか！」

土は「ふっ、」と笑った。

アギト「覚悟はいいわね？秀吉」

ファイズ「姉上も、後悔するでないぞ…」

アギト「言ったわね…じゃあ、行くわよ！」

ファイズ「！」

アギトとファイズはパンチとキックを繰り返しながら攻防戦を繰り返す。

アギト「たあっ！」

ファイズ「ぐっ…、はあ！」

アギト「きゃっ！」

アギトはファイズの顔面に左ストレートを当て、ファイズは倒れるが、即座に脚払いを喰らわせる。

アギト「やるじゃない、秀吉」

ファイズ「姉上もな…」

アギト「けど、これでどう？」

アギトはベルトの右側の方を叩くと、赤を基調とした、『フレイムフォーム』に、『フォームチェンジ』、さらに、ベルトから専用武器

『フレイムセイバー』を出現させ、装備する。

ファイズ「なっ…！」

アギトF「ふふ、さすがの秀吉も諦めたようね…ハアアアッ！」

ファイズ「くっ…！このままでは…！」

絶対絶命のピンチを迎えたファイズ。

すると、生徒の観客席からカズマがファイズエッジの柄の部分をついてファイズに投げる。

カズマ「秀吉っ！これ、受け取ってっ！」

シンジ「カズマそれどこから取ってきたの!？」

カズマ「そこから、無理矢理…」

オートバジン『ガガーピー…バチツ、バチツ』

全員「…お前何してんのーっ!? つーか、いろんな意味ですげえ!」

『ready』

ファイズエッジを受け取ったファイズはミッションメモリーを装填し、ファイズエッジの刃を出現させ、切りかかって来たアギトのベルトのちよつと上の部分にファイズエッジの刃を当てる。

『エクシードチャージ』

ファイズはファイズフォンの『ENTER』ボタンを押して、ファイズエッジの刃にエネルギーを送り込み、そして、ファイズエッジを左片手で横一文字に切り裂くように振る。

ファイズ「…ワシの勝ちじゃ」

アギトF「ひでよ…し、」

すると変身が解け、優子の姿に戻るが、優子は気絶して、倒れてしまっが、変身を解除した秀吉が受け止める。

高橋「一回戦、Fクラスの勝利です」

ワアアアア!

観客席からは、Fクラスの生徒たちが、歓喜の声をあげた。

映司「やった!秀吉君の勝ちだ!」

アंक「喜ぶのはまだ早い!こうなった以上、相手も仮面ライダーで来るんだからな」

ワタル「少なくとも五勝しなければいけませんからね…」

シンジ「あと四勝か…」

高橋「では、次の方どうぞ」

佐藤「私が出ます。科目は物理でお願いします」

雄二「よし、お前の出番だ、如月」

弦太朗「よっしゃ！任せろ！」

雄二「如月、変身しても攻撃で点数が減る。立っていられたとしても、先に0点になったら負けだ。」

弦太朗「ああ、わかつたぜ」

賢吾「佐藤、如月はFクラスと言えど、物理は奴の得意教科だ。油断するな」

ユウキ「頑張つてね、美穂ちゃん」

佐藤「はい。」

弦太朗「よおつ、物理を選んだのは、俺のことを気遣ってくれたからか？」

美穂「いいえ…私の得意教科だからです」

弦太朗「そうか、俺も物理が一番得意なんだけどよ、その点数で相手になるかなあ…」

佐藤「何を言つて…」

弦太朗「じゃあ、行くぜ！」

弦太朗はフォーゼドライバーを腰に巻き付けて、四つのスイッチを押す。『3』

『2』

『1』

弦太朗「変身！」

弦太朗は右手でレバーを動かし、右手を上げて、『仮面ライダーフォーゼ』に、変身する

フォーゼ「宇宙キターーッ！」
全員「……なにあの、仮面ライダー!?」「」

佐藤「……変身」

『open up』

佐藤は『仮面ライダーラルク』に変身したものの、フォーゼのインパクトが強すぎたために地味になってしまった。
二人が変身すると、頭上とモニターに点数が表示された

物理

Aクラス 佐藤美穂

389点

VS

Fクラス 如月弦太郎

781点

『な、何だあの点数!』

『バカな!本当にFクラスの奴が採れる点数かよ、あれ!』
ユウキ「賢吾くん……!」

賢吾「予想外だな……まさか奴がこれ程のものとは……」

ラルク「くっ……!こうなったら、一気に!」

『マイティ』

ラルクは一枚のカードをスラッシュする。すると、ラルクラウザーのポウガンの弾丸にエネルギーが溜まる。

フォーゼ「よっしゃあ、行くぜ!」

フォーゼは高くジャンプして、二つのスイッチをオンにする

『ロケット・オン』

『ドリル・オン』
すると、フォーゼの右腕にロケットモジュールが装備され、左脚にドリルモジュールが装備され、フォーゼは左手でレバーを動かす『リミットブレイク』

ラルク「ハアアアッ、ハアッ！」

ラルクは必殺技『レイバレット』をフォーゼに向けて撃つ。

フォーゼ「ロケットライダードリルキーク！」

フォーゼは、レイバレットの弾丸をいとも簡単に粉碎し、そのまま必殺技をラルクにかます。

ラルク「キャアアッ！」

ラルクの変身が解除され、フォーゼも変身を解除して、弦太郎は佐藤のもとに寄り、手を伸ばす。

弦太郎「なかなか、よかつたぜ。」

佐藤「……次は負けんません」

高橋「二回戦、Fクラスの勝利です」

ワアアアッ！

カズマ「よし、これで二勝だ！」

シンジ「それにしても、凄いライダーだったな……」

ユウスケ「ああ。土は知ってるのかな？」

ワタル「知らないと思いますよ……。」

三回戦

保健体育

Aクラス 工藤愛子

V S

Fクラス 土屋康太

に

続く
……

第13話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 前編（後書き）

明久「次回、「第14話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 中編」に、」
雄二「スイッチ、オン」

サブタイトルは、

「波乱のライダー対戦」
ではなく、

「波乱のライダー大戦」
が、正解です。

誤字すいませんでした。

第14話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 中編

高橋「では、三人目の方どうぞ」

康太「……（スック）」

愛子「じゃ、ボクが行こうかな」

Fクラスからは、ムツツリーニこと、土屋康太。対するAクラスからは、一年の終わりに転入してきた工藤愛子が出てきた。

ユウスケ「あの二人も仮面ライダーなのかな……」

ワタル「その可能性はありますね。……ところで、キバットはどこにいったんでしょうか。」

アスム「え？この世界に来た時から一緒にいたんじゃないんですか？」

ワタル「いえ、この世界に来た時はぐれてしまったんですよ。その代わりに？世がいるんですけどね」

キバット？世「……」

愛子「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子「でも、ボクだっけかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、実技で、ね」

ユウスケ「なにあの子！？自分で放送コードギリギリの事言ってるのに気付いてないの!？」

愛子「そっちのキミ、小野寺君だっけ？ 保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

ユウスケ「ええっ！ ん〜と、じゃあ、よろしくおねが」

ワタル「ユウスケにはそんな機会ありませんから、必要ないですよ」
海東「そうだよ。小野寺君には必要ないね」
士「ああ、全くだ」

ユウスケ「ねえ、泣いてもいい?」

高橋「そろそろ開始して下さい」

愛子「はい。じゃ、変身っ」と

愛子は、クウガの変身ベルト『アークル』を出現させ、左側にあるスイッチを押して、『仮面ライダークウガマイティフォーム』になる。

ユウスケ「なっ…!クウガだって!? 愛子ちゃん、やっぱり俺に実技を」

士&海東&ワタル「必要ない!」

ユウスケ「orz」

康太「……キバット」

キバット?世「しゃあっ!行くぜ、康太!」

ワタル「キバット!あなたなにしてるんですか!」

キバット?世「あれ、ワタル…それになんで親父まで?」

キバット?世「簡単に言えば、今の俺の主人はワタルであり、今のお前の主人はそいつなのだろう?」

キバット?世「うん、まあ、そんな所だな」

康太「……キバット」

キバット?世「ん? ああ、わりい。んじゃ、ガブツ!」

康太「……変身」

康太は「仮面ライダーキバキバフォーム」に変身した。

保健体育

Aクラス 工藤愛子

446点

VS

Fクラス 土屋康太

572点

明久「凄い！これなら、ムッツリーニが有利だ！」

雄二「どうだろうな…。力の差は、技術でカバーするからな。向こうの技術がどれほどものかにもよるしな。」

クウガMは、パンチ攻撃を中心に攻め続けているのに対し、キバKは、キック攻撃で攻撃と防御を同時に行い、クウガMを攻め続ける。

明久「雄二、この戦いは」

雄二「ああ、パワーだけでなく、テクニックもムッツリーニの方が上だ。この勝負、ムッツリーニの勝ちだ！」

雄二がそう言うと、キバKは、『ダークネスムーンブレイク』を、クウガMに喰らわし、見事勝利を収めた。

高橋「三回戦、Fクラスの勝利です」

ウオオオオ！

映司「凄い！これで三勝だ！」

シンジ「あと、二勝か…」

高橋「これで30ですね。次の方は？」

瑞希「あ、はい、私ですっ」

久保「それなら僕が相手をしよう…変身」

『コンプリート』

久保は『仮面ライダーデルタ』に、変身する。

瑞希「銃系のライダー…だったら…!!」

瑞希「リュウタロス、お願いします!!」

ユウスケ「え？リュウタロスって…」

すると、突然瑞希は、紫色のオーラのような物体に取り憑かれ、髪の毛が紫色になって、派手なDJのような格好になり、さらには、性格と声も変わった。

瑞希R『お前、倒してもいいよね？ 答えは聞かないけど!』

『ガン・フォーム』

瑞希が巻いたベルトから変わった音楽が流れてパスをかざし、『仮面ライダー電王ガンフォーム』に変身する。

その後、電王Gの勝利で、四回戦目も勝利を収めた。

高橋「四回戦、Fクラスの勝利です」

ウオオオ!

映司「やった!これであと一勝すれば…!!」

幸太郎「どうだろうな…次は勝てるかどうか難しいぞ」

映司「え？次の相手って……」

翔太郎「ついに来るか……門矢士！」

海東「士、もう勝つしか手はないよ」

士「分かっている。Aクラスが落ちこぼれ（Fクラス）に負けっ放しってわけにも行かないしな。それに、いい加減Fクラスのモブ共にはイラついていたんだ。ここで勝って、一気に黙らせてやる……！」

雄二「小野寺、……任せたぞ」

ユウスケ「ああ、任せてくれ！」

高橋「では、両者前へ」

士「よお、俺の相手はお前か……ユウスケ」

ユウスケ「まさか、お前だとはな…士」

士「先に言っておくが、俺はアイツらほど甘くはないぞ」

ユウスケ「……知ってるさ。なにを今更」

士「お前たち落ちこぼれが、学年最上級クラスに勝てないという現実を見せてやるよ…変身」

ユウスケ「言ったな…Fクラスはただの落ちこぼれじゃないこと、見せてやる…！ 変身！」

士は、『仮面ライダーディケイド激情態』に変身し、ユウスケは、『仮面ライダークウガアルティメットフォーム・ブラックアイ』に変身した。

二人は駆け出し、お互いの拳を振りかぶった。

士「ハアアアッ！」

ユウスケ「ウオオオッ！」

第15話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 後編
に、続く……………。

第14話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 中編（後書き）

本当は、電王VSデルタの戦闘描写は存在していたんですが、作者が間違えて電源ボタンを押してしまい、結局戦闘描写をカットしてしまいました。

誠に申し訳ございません

第15話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 後編

ディケイド激情態「はあっ！ やあっ！ たあっ！」
クウガUB「はあっ！ おりゃあっ！ てやあっ！」

『す、凄い。今までとはワケが違うぞ…！』
『ああ、お互い本気だよな…一体、どっちが勝つんだ…！？』

ディケイド激情態「はあああっ！」
クウガUB「オリヤアアッ！」

お互いの蹴りが同時にヒットし、火花を散らし、フィールドの端まで横向きに転がる。

ディケイド激情態「ぐああああ！」
クウガUB「がああああ！」

ディケイド激情態「ふっ、中々やるな…落ちこぼれの割りにはな…」
クウガUB「落ちこぼれだから…まともにやり合えるのさ、学年最
上級クラスさん？」
ディケイド激情態「だがな……」
クウガUB「？」
ディケイド激情態「落ちこぼれといつまでも遊んでるわけにはい
かないんでな！」

ディケイド激情態は、右腕にエネルギーを溜め始めた。

クウガUB「ハアアアア……」

同じく、クウガUBも、右腕にエネルギーを溜め始めた。

デイケイド激情態「ウオオオオツ！」

クウガUB「ハアアアアツ！」

お互いに、走り出し、パンチを繰り出した。

デイケイド激情態「ダアアアアツ！」

クウガUB「ハアアアアツ！」

互いのパンチがぶつかり、広範囲に爆発が広がり、召喚フィールドがブレイクする。

明久「うわあああ！ もうこれ、試召戦争でもなんでもないじゃん

！ ライダー大戦じゃん！」

秀吉「今更言うことでもなかるうに……」

美波「それで、どっちが勝ったの!？」

全員が中央に目をやると、デイケイド激情態とクウガUBが、互いのパンチを顔面にぶつけたまま立っていた。だが、点数の方は……

世界史

Aクラス 門矢士

1点

V S

Fクラス 小野寺ユウスケ

0点

高橋「五回戦、Aクラスの勝利です」

Aクラス「「ウオオオ！」」

映司「だ、大丈夫、まだ、一敗だから何とか…」

翔太郎「どうかな…次、勝てるかどうか分かんねえぞ…」
ワタル「えっ？ 次って確か翔太郎さんですよね？」

翔太郎「ああ。だが、いろんな意味で勝てる気がしねえ…」

高橋「では、六人目の生徒は前へ、」

照井「俺が行こう。科目は奴の得意教科英語で頼む」

亜樹子「キャー！ツ！竜ーくーん！ 皆打ち合わせ通り行くよ！

せいの、

Dクラス「「竜ーくーん！」」

翔太郎「……Fクラス左翔太郎（泣）」

照井「左……大丈夫か？」

翔太郎「大丈夫じゃねえ……（泣）」

照井「左、正直に言うが、俺だって恥ずかしいんだ…」

翔太郎「でも、なにこの完全なアウェイ…よく聞いたら、亜樹子とDクラスだけじゃなくて、A、B、C、E、更には俺のクラスのF

クラスまで、なぜかお前応援してるし……（泣）」

照井「……左、棄権するか？」

翔太郎「……ああ。（泣）」

高橋「六回戦、Aクラスの勝利です」

Fクラス「……ええー、あの負け方はねえだろお」「」

翔太郎「お前らのせいだろーっ!!」

照井「（左、いろんな意味でホントにスマン。）」

第16話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 決着編
に、続く……。

第15話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 後編（後書き）

翔太郎の完全アウェイ。Dクラスは、亜樹子の手によって、照井の事に関しては、侵略済みです。

次回は、遂に決着編です。どんな展開が起ころのでしょうか……。

ギャグ？ それとも シリアス？

どっちなんだか……。

第16話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 決着編

後藤「照井が終わりで…次は俺か。」

海東「頼んだよ、バース君。」

後藤「ああ、任せろ！」

雄二「次は火野、お前だぞ…」

映司「うん。英語も日本史もとられたけど、どんな教科がこようと
も、オーズの力で押し切ってみせる！」

雄二「その意気だ。頼んだぞ！」

高橋「では、両者共前へ」

映司「後藤さん…！Fクラス勝利のためにも、俺が勝ちます！」

後藤「火野…手加減はしないぞ！」

映司「ええ、ならどんな教科で来てもいいですよ」

後藤「そうか…なら、」

映司「あ、できれば生物いが」

後藤「生物でお願いします」

映司「……………」

生物

Aクラス 後藤慎太郎

283点

V S

Fクラス 火野映司

翔子「……変身」

『HENSHIN』

翔子「……キャストオフ」

『cast off』

『change beetle』

翔子は『仮面ライダーカブトライダーフォーム』に、変身した。

ユウスケ「なっ……！ カブトだっつて！」

ワタル「クロックアップ使われたら終わりですね」

幸太郎「こうなったら、雄二もカブト系のライダーになっってもらっ
しか……」

雄二「変身！」

雄二は『仮面ライダー龍騎』に変身した。

Fクラスライダー「……ゆううじいいい！」「」「」

カズマ「駄目だ……終わったorz」

アスム「まだです！」

ワタル「アスム……？」

アスム「あれを見てください！」

Fクラス「……？？？」

Fクラスの生徒全員は、アスムが指を指した方向に目をやると点数
が表示されたモニターを見てみた。

日本史

Aクラス 霧島翔子

315点

VS

Fクラス 坂本雄二
391点

『すげえっ！ 霧島翔子を越えたぞ！』

『これならいけるぞ！』

カブトR「くっ……！」

龍騎「どうした翔子？ 遠慮なんてしないでいいんだぞ。クロックアップを使いたくば、使えばいいだろう」

カブトR「……雄二！」

『clock up』

カブトR「ハアッ、タアッ、ヤアッ！」

龍騎「ぐっ……ぐおっ、ぐあっ！」

ユウスケ「まずい！ このままだと……！」

『1、2、3』

カブトR「……ライダー、キック」

『Rider kick』

カブトR「……ハアアアッ！」

ドオオオオン！

『『『……『『』』』』』』

沈黙の空気が、教室内に流れる。

ユウスケ「！ いない!？」

カブトR「……!？」

確かによく見ると、そこに龍騎の姿はない。
では、どこに？

……それは、

龍騎「ここだ、翔子」

契約モンスター『ドラグレッター』と共に、上空にいた。

龍騎「間一髪だったぜ…お前のライダーキックを喰らう直前に『ガードベント』で、防いで、喰らった瞬間上空に上がって『ファイナルベント』を発動したのさ!」
カブトR「……そんな!」

龍騎「俺の勝ちだ、翔子!」

龍騎「ウオラアアツ!」

ドオオオオン!

日本史

Aクラス 霧島翔子

0点

V S

Fクラス 坂本雄二

8点

高橋「……5 3で、Fクラスの勝利」

ウオオオオツ！！

ユウスケ「やったあああ！」

カズマ「遂に、念願のシステムデスクだーっ！」

ワタル「やりましたね、アスム！」

アスム「はいっ！」

弦太郎「いよっしやあああ！」

タクミ「そんな…僕達Aクラスが…」

海東「参ったね。Fクラスを見くびりすぎていたよ…」

フィリップ「彼らに、教えて貰ったね…」

照井「ああ…、」

後藤「学力だけが、全てじゃないってことか…」

賢吾「………」

ユウキ「賢吾君………」

雄二「さあ、勝った方はなんでも言うことを聞くんだろ？」

士「……一つだけな」

雄二「そうか、じゃあ、頼んだぞ……如月」

弦太郎「おうっ！」

Aクラス『!』

なぜ、弦太朗が…!?
次回、第17話 FとAは、最高の友達!?
に、続く……。『

第16話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 決着編（後書き）

映司VS後藤さん

ギャグ

雄二VS翔子

シリアス

という結果になりました。

完全オ리지ナルです。

次回はどんな展開が待っているんだか……。

第17話 FとAは、最高の友達！？

Aクラスの教室は、異様な程に騒がしかった。それもそのはず。なぜなら……

賢吾「どういうことだ…如月！」

そう、負けた方はなんでも一つだけ言うことを聞くのだが、勝った方からは何故か、弦太朗が願いごとを決めるらしいのだ。

ざわざわ…

弦太朗「そろそろいいか…？」

賢吾「どうせ、Aクラスの設備が欲しいんだろ…。さっさと持っていけ」

弦太朗「うん まあ、それもあるんだけどよ…それは、この試召戦争で決められていることだろ？ そうじゃなくてさ…」

賢吾「ならなんだと言っんだ」

弦太朗「ああ、そいつはな……」

弦太朗「Fクラスの設備をAクラスと一緒にしたうえで、FクラスとAクラスの教室を合体させるで、AFクラスにする！これが、俺達Fクラスの願いだ！」

賢吾「はっ……？」

Aクラス「……はあああっ!?!?」「」

賢吾「どういうことだ如月！」

フィリップ「君の言っている言葉の理解ができない！」

照井「俺達と同じ設備にして、」

後藤「教室を合体させて、」

ユウキ「AFクラスにする!?!?」

弦太朗「おう、そうだ。そうすれば、そっちも設備が替わることなく、いつも通りに勉強ができるだろ？」

タクミ「確かにそうではあるけど……」

弦太朗「それによお」

Aクラス「……?」「」

弦太朗「元々こうなるように、交渉の時に細工してくれたんだぜ。」

な、
士？」

士「ああ、それについて否定はしない……」

Aクラス「……なにいいい！」

海東「士！ どういうことだ！」

ユウスケ「最初からこれを狙ってたのか……？」

士「考えてみる。勝ち抜きの団体戦なのに、偶数のメンバーはおかしいと思わないのか？」

アंक「確かにな……」

士「もし、俺達が勝ってしまったらどうする？ そうなった場合は、今頃Fクラスはみかん箱になっていたかもしれないしな。」

士「だから、対戦方式も召喚獣ではなく、ライダー同士の戦いにしたのさ。そうすれば、学力が劣るFクラスでも、勝つことができるからな。八対八にしたのも、ちょうどよくするためだ」

ユウスケ「そ、そうだったのか……」

海東「でも、何故Fクラスなんだい？」

士「弦太朗の紹介だ。確かに落ちこぼれとはいったが、こいつらは一人一人生き生きしている。俺は思った。こいつらは努力すれば、絶対伸びる！ だからこそ弦太朗と約束したのさ……FクラスはAクラスの皆と友達になる。ってな……」

士「そして今、約束は果たした。友達の願いを、友達としてな！」

明久「友達、か……」

雄二「そいつも、悪くはねえな……」

秀吉「むしろ大歓迎じゃな」

康太「……………（コクリ）」

瑞希「友達……………」

美波「うん、いい言葉ね！」

翔子「……………皆は？」

愛子「そりゃあ、もちろん」

優子「断る理由なんてないでしょ？」

久保「なんたって友達だからね」

士「だそうだ、弦太郎」

弦太郎「いよっしゃあ、今日からFクラスは、Aクラスのみなどと、これから友達だーっ！！」

次回、第18話 誕生！AFクラス
に、続く……………。

第17話 FとAは、最高の友達！？（後書き）

考えたこともないオリジナル展開。

A Fクラス。果たして、どんな喜劇を見せてくれるんだか……。

第18話 誕生！AFクラス

翌日。Aクラスとの試召戦争をFクラスの勝利という形で幕を閉じたのは既に昨日の話。さて、本日Fクラスは晴れてボロい教室から解放されて、Aクラスの教室で、Aクラスと同じ設備のもとで勉強することができるFクラス。これも全て、Fクラスの如月弦太郎とAクラスの門矢土のおかげである。因みに、クラスが合体したためにクラス名は、AクラスとFクラスをそのまま組み合わせた、『AFクラス』となった。

〔AFクラス教室〕

明久「うわあゝ凄いなあ、これからシステムデスクで勉強ができるのかあゝ」

秀吉「これも全て、弦太郎と土のおかげじゃな」

康太「……（コクリ）」

弦太郎「よおっ！皆おはよう！」

明久「おはよう、弦太郎君」

秀吉「おはようなのじゃ」

康太「……おはよう」

雄二「よおっ、学園の革命児さん」

弦太郎「よせよ。普通に弦太郎って呼んでくれ」

雄二「そうか。分かったぜ弦太郎（革命児）」

弦太郎「……ホントに分かったのか？」

明久「それにしてもさあ、明るいよねえこのクラスって」

翔太郎「ああ、特に男子がな」

アスム「えっ？どうしてです？」

明久「だって……………」

『姫路さん、今日も美しいですね！』

『霧島さん、スツゴく美人ですね！』

『ユウキさん、こっち向いてーっ！』

『工藤さん、保健の実技教えグフォア！』

ユウスケ「愛子ちゃん、クウガの事もっと教えてあげるから、代わりに実技を！」

A Fライダー「……………」

この後ユウスケは、A Fライダーの一斉必殺技でフルボッコにされました。

高橋「それでは、皆さん全員出席していますね。朝のHRの前に、学園長からお話があります。では、学園長」

藤堂「あいよ。皆今日からはA Fクラスとして授業を受けるわけだが、一つだけお知らせがある。まず、このA Fクラスの存在が気に食わない生徒が多数いることが分かった。」

士「そいつは、やっぱりFクラスが優遇されているってことか？」

藤堂「そうだよ。落ちこぼれのFクラスがAクラスの設備と可愛い女子生徒と一緒に授業を受けることが気に食わない奴がいるのさ」

A F男子「……………」おいちよつと待て、後者の方単なる男子の嫉妬じゃねえか……………」

士「一応聞くが、前者の方は主に誰が言ったんだ？」

藤堂「確か、Bクラスのねも……………」

A F全員「」「もういいです言わなくて」「」

藤堂「まあ、こんな感じで色々不満に持つ奴がいて、クレームを言っ
てきてうんざりしてるから、あんた達に言っておきたいことがあるんだよ」

士「それは何だ？」

藤堂「今後の試召戦争でA Fクラスに勝ったクラスは、AかFのどちらかを引きずり降ろして、Aクラスの設備が手に入れることができるようにしたから、よろしく頼むよ。アタシからの話は以上だ。勉強がんばりな……」

士「ちよつと待て、おいババアアアツ！」

ユウスケ「つまりさあ……」

ユウスケ「俺達は、今日から他のクラスに狙われるってことだよな……」

A F クラス ココウゾダドンドコドーン！」「」

次回、第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編

第18話 誕生！AFクラス（後書き）

だんだん皆のキャラ崩壊速度が上がってきている気がする。

今回は、清涼祭編なわけだが、清涼祭編といえば作者の嫌いな“アイツら”が出てくる話でもあります。バカテスを良く知る人なら絶対ヤツらだと、すぐに気付くはずですよ。

さて、どうやっていたぶってやるのか。

「????&????」「つて、オイ！」

第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編（前書き）

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

如月弦太郎の答え

『友達』

火野映司の答え

『明日のパンツ』

左翔太郎の答え

『ハードボイルド小説』

門矢士の答え

『プロ並みの写真の撮影技術』

ワタル&アスムの答え

『思い出』

剣立カズマの答え&辰巳シンジの答え

『出し物の売り上げ金』

尾上タクミの答え

『出番』

小野寺ユウスケの答え

『Hなほ……成人向けの雑誌』

教師のコメント

ワタル君とアスム君以外は後で職員室に来なさい。如月君はいじめ

の相談なら後で個別で話し合いをします。

第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編

5月某日。

文月学園では、新学年最初の行事である文化祭『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

殆どのクラスは出し物が決まり、早いクラスは準備に取りかかっている。さて、我等がAFクラスはと言うと……

ユウスケ「土！今朝俺の目覚ましの電池抜きやがったな！」

士「授業中寝ているから、グッスリ寝させてやろうと思ったんだがな。いけなかつたか？」

ユウスケ「当たり前だ！昨日8時に寝たんだから充分寝られるかと思っ、朝8時にセットしたら時計見たら昨日の10時辺りに止まっていたし！」

海東「待ちたまえ小野寺君！寝るの早過ぎだよ！」

ワタル「しかも起きる時間遅いですね」

と、こんな感じではしゃいでいて、出し物所の話ではなかった。

だが、次の瞬間……

鴻上『やあ、諸君！清涼祭の出し物に困っている所だね！』

「……なんか、急に变なの出てきたー！ーっ！」「」

AFクラスの教室のモニターと全てのシステムデスクをジャックしてきて画面に現れたのは、文月学園のスポンサーの1社である『鴻上ファウンデーション』の会長、鴻上光生その人であった。

映司「あれっ!? 鴻上さんもこの世界に来てたんですか!？」

鴻上「当たり前じゃないか! 我々鴻上ファウンデーションは、文月学園のスポンサーでもあるのだよ!」

映司「そ、そうなんですか。ていうか、相変わらずケーキ作るのすきですね。」

鴻上「今度清涼祭の屋台で出して欲しいと頼まれたんだよ。楽しみにしているといい。」

鴻上「さて、本題に入るうか…木下ゆううこ君!」

優子「うえええ! つて、アタシ…ですか?」

鴻上「そんなに驚く必要はないよ優子君」

優子「(普通急に呼ばれたら誰でも驚くと思うんだけど…)」

鴻上「では、優子君。AFクラスの出し物の話はどこまで進んでいるかな?」

優子「それが…皆はしゃいでばかりで出し物所の話じゃないんです…」

鴻上「ふむ、そうか…優子君、耳を塞ぎたまえ」

優子「へっ?」

鴻上「君たち! いいいずかにしたまええええ!」

キーン!

明久「あう…耳が…」

雄二「いきなりなんて大声出しゃがるんだあのオッサン…!」

鴻上『さて、清涼祭の出し物だが君達AFクラスが決まっていなかった場合の事を考えて私はある人物に助っ人を頼んだんだよ。もうすぐ来るはずなんだが……』

鴻上がそう言うのと教室に一人の男が入ってくる。

伊達「いや〜ここが、AFクラスか〜広いね〜」

入って来たのは、文月学園の保健体育教師“伊達明”だった。

後藤「伊達さん！どうしてここに？」

伊達「よお、後藤ちゃん。そいつは俺が会長に頼まれた助っ人だからさ」

映司「助っ人って、伊達さんの事だったんですか」

鴻上『その通りだよ火野君。そして何故彼が助っ人なのか。それは、君達に映画を作って欲しいんだよ！』

ユウスケ「え、映画！？」

シンジ「俺達ですか！？」

鴻上『その通りだよ。現に伊達君は、『伊達組』のシャツを着ているじゃないか』

映司「あ、ホントだ……」

明久「それで、何の映画を作るんですか？」

鴻上『君達AFクラスには、『仮面ライダー』の映画を作っ欲しいのだよ！』

「『仮面ライダー』の映画！？」「」

鴻上「そうだよ。実を言えばもうタイトルは私の方で決めておいたのだよ。」

鴻上「名付けて、『仮面ライダー対FFF団 Movie大戦jealousy』だ！」

「なにそのタイトル!?」

翔太郎「jealousy:確か、嫉妬だったか？」

鴻上「後の事は、監督である伊達君の指示に従って、君達の思い出に残る最高の映画を作ってくれ。私からは以上だ。伊達君頼んだよ。」

伊達「ああ、任せとけ会長！」

鴻上は通信の電源を切った。

美波「す、凄い人なのね。鴻上ファウンデーションの会長って……」
瑞希「火野君と後藤君はお知り合いなのですか？」

映司「うん、まあ、ちよつとね……」

後藤「相変わらず色んな意味で凄い人だよ……全く」

伊達「よぉし、それじゃあ、タイトルはさっき会長が決めてくれた通り『仮面ライダー対FFF団 Movie大戦jealousy』で行くからな！」

明久「結局それで行くんだ……」

伊達「まずは、皆に脚本を分けるぞ。貰ったらストーリーの所を開

いてくれ」

ユウスケ「ストーリーか。え〜となになに？」

仮面ライダー対FFF団 Movie大戦Jealousy
ストーリー

地球は春真っ盛り、平和な日常。だが、その平和な日常をぶち壊すかのように現れた悪の組織『FFF団』が、次々と人間（彼女持ちの男性のみ）を狙っては即刻死刑。遺言を残す時間さえ与えないかのごとく残虐非道な行為を繰り返し、人類を恐怖のどん底に突き落とした。そんなFFF団の前に立ち向かった勇氣ある仮面の戦士『仮面ライダー』がFFF団に世界平和と人間の幸せのために戦いを挑んだ！今ここに、嫉妬の憎悪に吞まれた哀しき組織『FFF団』と、いくつもの悪の魔の手から人類を救ってきた『仮面ライダー』の戦いの火蓋が切って落とされた！

伊達「どうだ皆？ストーリーを読んだ感想は？」

「『意外とまとまなストーリーだった』」

伊達「だろ？俺も最初タイトル聞いた時不安だったけどよ、ストーリーを読んだら案外まとまだったのに驚いたぜ」

伊達「さて、ストーリーが分かった所で次は役決めだ。次のページには、誰が何の役やるかは書いてあるからしっかり呼んでくれよ」

生徒達は一斉に次のページを開き、キャスト紹介の所を見た。

キャスト

仮面ライダーオーズ / 吉井明久
仮面ライダーW / 左翔太郎・フィリップ
仮面ライダーディケイド / 門矢士
仮面ライダーキバ / 土屋康太
仮面ライダー電王 / 姫路瑞希
仮面ライダーカブト / 霧島翔子
仮面ライダー響鬼 / 久保利光
仮面ライダーブレイド / 島田美波
仮面ライダーファイズ / 木下秀吉
仮面ライダー龍騎 / 坂本雄二
仮面ライダーアギト / 木下優子
仮面ライダークウガ / 工藤愛子
仮面ライダーNEW電王 / 野上幸太郎
仮面ライダーディエンド / 海東大樹
仮面ライダーアクセル / 照井竜
仮面ライダーバース / 後藤慎太郎

ゲスト

仮面ライダーフォーゼ / 如月弦太郎
仮面ライダー1号 / 本郷猛 芦川シヨウイチ
仮面ライダー2号 / 一文字隼人 天堂ソウジ
仮面ライダーV3 / 風見志郎 小野寺ユウスケ
ライダーマン / 結城丈二 尾上タクミ
仮面ライダーX / 神敬介 剣立カズマ
仮面ライダーアマゾン / アマゾン アスム
仮面ライダーストロンガー / 城茂 辰巳シンジ
スカイライダー / 筑波洋 ワタル
仮面ライダースーパー1 / 沖一也 火野映司
モモタロス
ウラタロス

キンタロス
リュウタロス
ジーク
テディ
光夏海
鳴海亜樹子
アंक
泉比奈
歌星賢吾
城島ユウキ

FFF団

FFF団首領

ナギナタカラス / 須川亮

FFF団幹部

グレネードバツファロー / 近藤吉宗

ガトリングゴブラ / 田中明

チャクラムトカゲ / 柴崎功

バーナーシャーク / 武藤啓太

FFF団員・その他

A Fクラス・B・C・D・Eクラスの協力してくれた生徒一同

伊達「キャストを見た感想は？」

「「「ツッコミ所が多すぎる」「」」

伊達「あ、因みにスーツアクターとか雇わないから、アクションシ

「インで怪我したりとか死なないようにするんだぞ」

明久「ちょっと待って、怪我はともかく死なないってなに!?!」

秀吉「下手をすると、死んでしまうような危険なシーンがあるという事じゃな」

ユウスケ「危険なシーン……濡れ場があるってこと」

「……ねえよ!」「」「」

伊達「よし、そうと決まれば早速今日から始めるぞ!」

映司「えっ!もうですか!?!」

伊達「当たり前だろ。さ、皆。撮影ロケ地にしゅっぱーっ!」

「……ええええええええええ!」「」「」

こうして、AFクラスの映画の撮影が始まった……

第20話 早過ぎる文化祭 開幕!清涼祭!危険な撮影編
に、続く……………

第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編（後書き）

とりあえずツツコミ所まとめ

平成ライダー ディケイド・W・サブライダー四人以外バカテスの
キャラクター

フォーゼ&弦太郎 助っ人ゲスト扱い

昭和ライダー フォーゼと同じ

リイマジ+（映司） 昭和ライダー役にされた。しかも、第1話
以来のシヨウイチさんとソウジさん。

FFF団

首領・ナギナタカラス モデルは、『初代仮面ライダー』に登場し
た『ギルガラス』 ギルガラスは実際にナギナタを使って戦います。
幹部

グレネードバッファロー 『V3』（劇場版）に登場した『タイホ
ウバッファロー』がモデル

ガトリングゴブラ 『V3』に登場した『マシンガンスネーク』が
モデル

チャクラムトカゲ 『V3』に登場した『ノコギリトカゲ』がモデル
バーナーシャーク（恐らく）『V3』に登場した『イカファイヤ
ー』と『初代仮面ライダー』に登場した『ギリザメス』がモデル

結論

バーナーシャークのイカファイヤーの部分は、ファイヤーバーナー
だけ。

いずれは、ちゃんとした作品で投稿するつもりです。短編になるか

連載かどちらになるかは今のところ未定です。

第20話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 危険な撮影編

（撮影ロケ地・どっかの採石場）

ドカーン！

ボカーン！

ドーン！

伊達「カットカットカット！ そこ、Cポイント火薬の量が少ないぞ！ しっかり調節しといて！」

「すいませーん！」

バース「うおおお！」

ダン！ダン！ダン！

伊達「カットカット！ 後藤ちゃん、バスターの出力が足りてないんじゃないの？ もうちょっと上げて！ 70%ぐらいでいいから！」
後藤「はいっ！」

スーパー「トオツ！ スーパーライダー、げつめーんキーンツク！」

バキィツ！

カマキリ男「ぐわああああ！」

ドゴオオオン！

伊達「カット！いいねえ、火野。スーパー1様になってるよ！」

スーパー1「はい、ありがとうございます！」

と、こんな感じで撮影は進んでいた。だが、一方では…。

ユウスケ「違う違う！青のクウガはドラゴンロッドをもっと素早く扱わなきゃ！」

クウガD「ええ！これ結構難しいよ！」

シヨウイチ「アギトのパンチはもつと力強くだ。ほら、1、2、1、2」

アギト「うう…これ結構力いるなあ…」

シンジ「ドラグセイバーは片手でもつと滑らかに振るんだ。…そお

そお、そんな感じ」

雄二「片手で滑らかったのがポイントだな…」

タクミ「次、フォンブラスターで撃破したら、ファイズエッジで斬りつけてそれが終わったら、岩の上にいる敵をジャンプして回し蹴りで落とす！」

秀吉「な、なかなか体を使うのう…」

カズマ「ブレイラウザーは意外と重いからね。まずは、素振りからだね」

美波「こういうのって夢のある設定で『凄い金属だけど軽くできている』なんて設定があるかと思ったのに…」

アスム「そうですね。久保さん上手ですね。」
久保「でも、基本僕は運動をしないからなあ…きちんと体力をつけないと」

ソウジ「カブトのライダーフォームはパンチよりキックをメインに戦うんだ。…そうそう、そんな感じでいい」

翔子「……けど、意外ときつい」

モモタロス「いいかあ、剣つてのはなあとにかく相手を倒すつもりで大胆に振るんだよ。試しに、そのカメを倒してみな。」

瑞希「は、はい！やってみます！」

ウラタロス「ちよつと待って瑞希ちゃん、ホントにやる必要ないんだよ！？」

キンタロス「(….) zzzz」

リュウタロス「」

ジーク「全く相変わらず騒がしいぞ下部たちよ」

幸太郎「どっから教えたらいい？」

テディ「とりあえず彼等を止めるべきだと思う」

ワタル「キバはアクロバットに体を動かすんですが、康太さん運動神経いい上に体柔らかいんですね」

康太「……この位できて当然」

とまあ、こんな感じで彼等彼女等は、指導を受けていた。因みに明久は映司とアंकから一発合格を貰ったので実質今は、シーンの撮影中であった。

伊達「それじゃあ、明久。変身いってみようか！よーい、スタート！」

明久「僕はお前を許さない…自分の嫉妬心を物理的な痛みで代えて人の自由と幸せを奪っていく行為を…絶対に、許すわけにはいかないんだ！ 変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ、タ・ト・バ！』

伊達「カット！いいねえ、なかなかいいぞ。」

明久「ありがとうございます！」

伊達「よあし、一旦休憩に入るぞ。」

愛子「ふう、結構疲れるなあ」

優子「スーツアクターもスタントマンも雇わない自分たちで全部やるもの。そりゃ辛いわよ」

翔子「……でもそのぶん、きっといい映画になる」

雄二「そうだな。こんなの絶対忘れられないぜ」

明久「そうだねえ…って、あれ？」

瑞希「明久君、どうかしたんですか？」

明久「ねえ…伊達先生と話してる人、ひよつとして教頭先生かな？」

秀吉「本当じゃ。下見にでも来たのかのう？」

康太「……怪しい」

美波「そうよねえ。学園長が来るのは分かるけど、教頭先生って変じゃない？」

雄二「……」

翔子「……雄二？」

雄二「何か裏がありそうだな。皆、撮影中は気をつけるよ」

明久「う、うん…」

そして、撮影再開

伊達「よぉし、じゃあ、V3がバイクで地雷源を突破していくシン行くぞお。スタート！」

ドーン！

ドガン！

ボカーン！

ドーン！

V3「（あれ、おかしいな。爆薬の量多すぎないか？）」

そんなことを考えながら走る矢先、遂に一番爆薬を使うポイントに
来たユウスケ。

だが…、

雄二「！ 避けるユウスケーっ！」

V3「！！！」

ドグアアアアーン！

伊達「！ カット！ユウスケ、平気か！？」

V3「だ、大丈夫です…」

伊達「オイ！あそこに爆薬をセットしたのは山中と種口だな。ちゃんと規定の量を使ったのか！」

「は、はいもちろん！」

「間違えるはずがありません！お願いです、信じてください！」

伊達「うーん…誰かが細工しやがったか？」

明久「えっ！？だとしたら誰が！？」

雄二「…さっきの教頭があやしいな…。」

康太「……（コクリ）」

後藤「伊達さん、さっき教頭先生となにを話してたんですか？」

伊達「……映画を作るのを止める…って言われたんだよ」

「…ええっ！？」

教頭がなぜ……！？

次回、第21話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ そんな脅迫に
怯むと思っているのか！編
に、続く……

雄二「やっぱり教頭か…」

明久「でも、何でなんだろう？ 僕達教頭先生に恨まれるような事したっけ？」

ユウスケ「うん。思い当たる節がないな。」

ワタル「皆さん。セットした爆薬の事なんです…」

雄二「おう。で、どうだった？」

ワタル「やっぱり悪い予感が当たりました。他の設置場所の爆薬の量も規定より多くなっていました。」

雄二「やはりな……」

後藤「伊達さん。撮影は続行するんですか？」

伊達「……いや、向こうが何仕出かすかわかんねえからな。今日はもう片付けて終わりにする。皆、お疲れ様。」

「……お疲れ様です」「」

撮影を終了してAFクラスの生徒達は、下校する。

デッデッ

明久「それにしても、何なんだろうね……」

秀吉「教頭の事かろう？」デッデッ

瑞希「私達、何も悪い事はしてない筈ですが……」デッデッ

愛子「一体何なんだろうねえ。」デッデッ

優子「……悪い事ではないと思うけど、試召戦争で変身して戦った事かな？」デッデッ

翔子「……それよりも、クラスの合併の方がありえそう」デッデッ

久保「いや…それに不満を持つのは教頭先生ではなく、前にも学園長が話した他のクラスの人達で教頭先生本人には何も恨まれるようなことではないはずだ。」デッデッ

デッダン、ダン、ダン

デッダン、ダン、ダン

雄二「……ちよつと待て」

明久「?どうかしたの雄二?」

雄二「さつきから流れてるこのBGMはなんだ…」

久保「ああ、これは確か『帰ってきたウルトラマン』で使われたBGMだね」

雄二「なんでそんなのが流れている!?!」

康太「……作者曰わく、雰囲気作り」

優子「どうせなら仮面ライダーのでやるうよ…」

……ワンダバダワンダバダワンダバダ

「……それも『帰ってきたウルトラマン』!?!」

明久「しかも、雰囲気作りできてないし…」

「伊達先生。これだけの金額を用意すると言っているのにまだ映画

を作ろうとするのかね？」

伊達「……悪いけどね、教頭。あんたは生徒の思い出を金で釣ろうなんて思っているのかい？今日の午後もなんか細工したらしいけど、あんた…思い出を壊すだけじゃ飽きたらず、生徒の命まで持って行くこととしたのか？」

「なに…生徒の命まで持って行くこととはせんよ。むしろAFクラスには優秀な人材が多過ぎる。あれが、私の物になるのならわざわざ殺すような真似はしないよ」

伊達「笑わせないで欲しいな。どうやってあんたがアイツらを自分の物にしようってんだい？」

「それは…こうするのさ」

すると教頭は、ポケットからUSBメモリのようなものをだした。

伊達「おい、そいつはまさか…」

「ふっふっ。その通りだよ」

伊達「パソコンのUSBメモリか！？そいつでどうやってアイツらを自分の物にしようってんだ！」

ズダアアアン

教頭は派手にずっこけた

「USBメモリじゃない、ガイアメモリーだ！とにかくコレを使って、学園長を失脚させ、学園を私の物にするのが、私の野望だ！」

「君も命びろいがしたければ、学園長と鴻上ファウンデーションとの関係を絶ち、映画の制作を中止するのだな。」

伊達「悪いけど、そいつはお断りだ。」

「なににい？」

伊達「俺が、そんな脅迫に怯むと思っているのかい、教頭。」

「くそっ、格なる上は貴様を殺してやる！」

『ウエザー』

「むんっ！」

教頭は、ガイアメモリを首にさして、『ウエザードーパント』になる。

「ふっふっふ、この姿と力を見たからには、命はないぞ。ふっふっふっふっふっふ」

伊達「あ、そ。でも、こっちにだって戦う力はあるんだぜ。」

伊達はそう言つと、腰にバースドライバーを巻き、セルメダルを入れて

伊達「変身」

キリキリ、カポン。

ダイヤルのような物を回すと、パワードスーツのような物に包まれ、『仮面ライダープロトバース』に変身する。

『Reverse Re：verse』を再生しながら読むと楽しいかも。

「な、なに仮面ライダーだと！」

プロトバース「仮面ライダープロトバース。それが俺の今の戦う姿さ」

「おのれえ…！ウエザーの力で捻り潰してくれる！ むんっ！」

ウエザードーパントは火炎放射で、プロトバースを攻撃するが、プロトバースはヒラリ、と避けてウエザードーパントに接近して、パUNCHのラッシュを浴びせる。

プロトバース「はあっ！てりゃっ！おおおりいやあっ！」

「ぐおおおおっ！」

プロトバース「あんた力の使い方が分かってないんじゃないの？手応えなさすぎるぜ。」

「ぐぬううう、おのれえ…！」

キリキリ、カポン。

『ブレストキャノン』

キリキリ、カポン。

『セルバースト』

プロトバース「はああああ、おりやあああっ！」

「うおおおおっ！」

プロトバースは、ブレストキャノンのセルバーストをウエザードーパントに喰らわせるが、ウエザードーパントはまだ生きていた。

「くそっ！これでは力を手に入れた意味がない！ここは撤退だ！」

ウエザードーパントは雲に包まれて、その場から逃亡した。

プロトバース「あっ！おい、待ちやがれ！」

しかし、雲が消えたと同時に、ウエザードーパントの姿はなかった。伊達はそれを確認すると変身を解除した。

伊達「ちいつ、逃げられたか…。」

来週は、清涼祭当日。果たして映画は完成するのか!?

次回、第22話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 当日編その1
に、続く……………

第22話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 当日編その1

清涼祭初日の朝。AFクラスの教室は映画館そのものに姿を変えていた。教室にあった壁一面の大型ディスプレイはスクリーンのように改造されていた。

士「あとは、鑑賞中の飲食物を作るだけだな」

ユウスケ「パンフレットの用意は？」

フィリップ「できている。これだけの数なら今日一日分は持つ。」

幸太郎「入場特典は？」

タクミ「清涼祭全日分余裕で持ちます！」

シンジ「……（チラッ）」 明久の方を見る

明久「……………orz」

照井「あれは暫く立ち直れそうにないな」

弦太郎「ようし！これで教室はどっからどう見ても映画館そのものだ！」

ユウキ「うわぁ……凄い」

賢吾「驚いたな。まさかここまでリアルにできるとは…」

士「カズマ、飲食物の方はどうだ？」

カズマ「皆頑張ってるよ。それに、一人手伝いが来たし厨房の男子達の士気も上がって相当早いペースだよ。もうそろそろできるころだと思っけど…」

士「そうか…カズマ、一つだけ聞かせてくれ」

カズマ「なに？」

士「そのお手伝いは誰だ？」

カズマ「さあ？俺は聞いてないけど？」

ワタル「それにしても、急に厨房が静かになりましたね。」

アスム「ええ、さつきまであんなに騒いでたのに……」

士「……嫌な予感がするな。確か厨房班のリーダーは海東だったか？おーい、海東ー、終わったのかー？」

すると突然、厨房から一人の女子が出てきた。

瑞希「ごめんなさい！試食を頼んだら厨房の皆が倒れちゃいました！」

カズマ「えっ……！？もしかして、お手伝いって瑞希ちゃんの事……？」

瑞希「はい、そうですけど……」

カズマ「やつぱりいいいい！？」

士「どうしたカズマ」

カズマ「士、厨房を見てきてもいい？」

士「？別に構わんが？」

カズマは厨房に行くと、『予想通り』と、言わんばかりの表情を顔に浮かべて戻ってきた。

カズマ「やつぱさうだった……」

アスム「カズマさん！それってもしかして……！」

カズマ「厨房の皆が、（瑞希ちゃんの）料理食べて泡吹いてた……」

士「……姫路。ポップコーンを作るのに何を入れたんだ」

ユウスケ「やめとけ士。聞くと食べなくなるぞ」

海東「全く、死ぬかと思ったよ……」

アスム「師匠、ご無事でしたか！」

ユウスケ「よく生きていられたな」

海東「姫路君が来て、厨房の男子の士気が上がって早く終わったのに、最後の試食で皆倒れるとは思わなかったよ……」

士「念のため他のも試食しておくか。カズマ試食を」

カズマ「やだよ。チーフが試食すればいいじゃないか」

士「チーフ命令が聞けないのか!」

カズマ「俺は社長だよ!? 一番偉いんだよ!？」

シンジ「カズマ子供みただよ」

士「……仕方ない。そこまで言うなら……」士は、ライドブツカーから二枚のカードを出す。

士「ここに、デイケイドとブレイドのカードがある。もし、俺がデイケイドのカードを引いたら俺が試食する。だが、ブレイドのカードを引いたらお前が試食するんだぞ。それでいいな?」

カズマ「ああ、分かったよ。それでいこう」

ユウスケ「カズマ。その勝負なんか間違ってる」

海東「ブレイド君キミ勝てないよ」

カズマ「大丈夫だよ。いくらチーフでもシャツフルをカンニングするなんていうズルはしないよ」ユウスケ&海東「そこじゃないよ!？」

カズマは士が見えないようにカードをシャツフルする。

カズマ「よし、これなら絶対に分からないぞ。チーフが試食するのは決定だな」

士「ふん、言ってる」

カズマ「じゃあ、どっちがどっちか当ててみる!」

シュツ

ブレイドのカードを引く音

士「決まりだな。カズマ、試食」

カズマ「くそーっ！よく見たらカードの裏に紋章があるからまる
分かりじゃないか！」

ユウスケ&シンジ&アスム&ワタル&海東「……………気付くの遅っ
！……………」

士「ルールはルールだ。さっさと試食しろ」

カズマ「くそっ、分かったよ……」

パクツ、モグモグモグ

カズマ「なんだ、そこまで不味くはな……………い……………」

バタンツ

チーン

「……………カズマ……っ！！……………」

士「……………」

明久「えっ、飲食物は出さないの？」

士「ああ。元々食いもんや飲み物には屋台があるしな。それ食えば
いいだろ」

ユウスケ「おまけに、映画館の食べ物でお腹いっぱいになって、昼
食食べれなかったってなったら悪いしね……」

明久「そっか……」

雄二「楽しみにしてたんだけどな」

秀吉「残念じゃのう」

康太「……………（コクリ）」

瑞希「私も、せっかく作ったのに、残念です……………」

明久「……………」

雄二「……………」

秀吉「……………」

康太「……………」

ユウスケ「……………」

シンジ「……………」

タクミ「……………」

アスム「……………」

幸太郎「……………」

ワタル「……………」

士「……………」

海東「……………」

翔太郎「……………」

フィリップ「……………」

照井「……………」

映司「……………」

アネク「……………」

後藤「……………」

弦太朗「……………」

賢吾「……………」

ユウキ「……………」

カズマ「……………」

雄二「……………なあ土、カズマは一体
士「飲食物の提供は禁止だ」

次回、第23話 開幕！清涼祭！ 当日編その2
に、続く……………

第22話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 当日編その1（後書き）

なかなか思い通りに書けない今日この頃。果たして、上手く話が繋がる事が出来るだろうか……。

第23話 開幕！清涼祭！ 当日編その2

明久「いや、それにしても凄く人気あるね。僕達の映画」

雄二「あそこまでクオリティが高くやれたんだ。年代関係なしで誰でも楽しめるからな」

シンジ「まあ、中には入場特典目当てに来る人もいるしね……（ボソツ）」

明久「シンジ君。僕今スツゴク嬉しくないような事聞いたんだけど、シンジ「気のせいじゃない？」」

賢吾「そういえば坂本。召喚大会のメンバーはどうなったんだ？」

ユウキ「確かークラスで2チームまでならOKなんだよね？」

弦太郎「てことは、俺達AFクラスなら4チームまでOKって、ことだな」

ワタル「いくらなんでもそれは……」

雄二「弦太郎の言う通りだ。俺達AFクラスなら4チームまでOKだ」

ワタル「いいんですか!？」

カズマ「まあ、うちのクラスって、AクラスとFクラスが合併したクラスだからね」

雄二「なんだカズマ。もう大丈夫なのか？」

カズマ「うん。その後士絞めたからもう大丈夫だよ」

幸太郎「それだと士が大丈夫じゃないと思う」

ユウスケ「まあ、士の方にも問題はあつたしな……」

士「……………」 泡吹いてる

明久「ねえ、あれ助けた方が良くない……?」

ちなみに、メンバーは

男子

・ 明久&雄二ペア

・ 幸太郎&タクミペア

女子

・ 瑞希&美波ペア

・ 翔子&優子ペア

という、結果になった。

ユウキ「ねえ、弦ちゃん」

弦太郎「ん？どうかしたのかユウキ？」

ユウキ「弦ちゃんは…瑞希ちゃんのあの事聞いてる…？」

弦太郎「知ってるぜ。転校の事だろ。賢吾から聞いた。」

ユウキ「その事なんだけど…実は、その話なくなったらしいの！」

弦太郎「そいつは本当か!？」

ユウキ「うん。弦ちゃんと土君が設備を替えてくれたおかげで昨日

瑞希ちゃんの両親が転校の話をしにしてくれたらしいよ！」

弦太郎「そうか。そいつはよかった…」

ユウキ「それと明久君達は、召喚大会に行くからここは任せたって、

雄二君が言ってた」

弦太郎「よし、そうと決まればお仕事再開だ！」

ユウキ「うん！」

賢吾「(ちっ、如月の奴め……羨ま…羨ましいぞ!)」

に、
続く……。

第23話 開幕！清涼祭！ 当日編その2（後書き）

久々の投稿でこの短さ。おまけにサブタイ変更。次回は、召喚大会一回戦ですが、書くのは男子の2ペアのみの予定です。感想お待ちしております。

第24話 開幕！清涼祭！ 召喚大会一回戦

召喚大会会場

「それでは、召喚大会一回戦を始めたいと思います」

明久「雄二、一回戦目はEクラス何だよね？」

雄二「ああ。油断しなければ楽な相手だしな。」

モニターから鉄人の声が響く

西村「青コーナー、AFクラス 坂本吉井ペア」

西村「赤コーナー、Bクラス 本多菊入ペア」

雄二「何だと!？」

明久「どうして!?! 相手はEクラスのはずじゃあ……」

雄二「まあ、鉄人の事だからちゃんとやり直すだろうっ……」

西村「どうした!？」

「き、機材のトラブルかと……」

西村「後がつつかえる構わず続行しろ!」

雄二&明久「鬼かあんたは！」

律子「しょうがないわね…真由美。とっとと終わらせよ」

真由美「そうね。相手はどうせAFクラスの贅沢バカコンビだしね」

西村「一回戦、対戦科目数学。始め！」

律子&真由美「試獣召喚！（サモン！）」

数学

Bクラス

本多律子 175点

&

菊入真由美 165点

明久「やれやれ…でか口叩いた割には大した事ないね」

雄二「全くだ。俺達AFクラスもなめられたもんだ」

律子「な、なんですって！」

真由美「アンタ達がアタシ達にかなう点数がとれるはず…」

雄二&明久「試獣召喚！（サモン！）」

数学

A Fクラス

坂本雄二 3 2 1 点

&

吉井明久 2 4 7 点

律子「嘘！なんでアンタ達がこんな…！」

雄二「単純に贅沢していると思っっているのか？」

明久「確かに贅沢させて貰ったよ…学習環境をね！」

数学

A Fクラス

坂本雄二 3 2 1 点

&

吉井明久 2 4 7 点

V S

Bクラス

本多律子 0 点

&

菊入真由美 0 点

西村「勝者青コーナー 坂本吉井ペア！」

真由美「そ、そんな…」

律子「アタシ達がこんなバカコンビに…！」

明久「バカコンビ？失礼だな。負けたクセに」

雄二「お前らなんざ、努力すりゃあいくらでも越えられるんだぜ」

律子&真由美「く、悔しい…！」

タクミ「お疲れさん、二人とも」

タクミは二人にオロナミンCを渡す

明久「ありがとう。タクミ君」

雄二「サンキューな。タクミ」

幸太郎「二人共。気持ちは分かるけど、あんまり敵を作るなよ。ただでさえあの根本が…」

雄二「分かっている。俺達だって無駄に面倒な事はしたくはない」

明久「Aクラスの設備を手に入れた今、試召戦争をする目的もないしね」

タクミ「そうだね…おっと、そろそろ僕達かな。行きましょう、幸太郎さん」

幸太郎「そうだな。じゃ、行ってくる」

明久「うん。頑張つてね」

タクミと幸太郎は会場に駆け足で行く

西村「青コーナー、AFクラス 尾上野上ペア」
タクミ「西村先生、言いにくくないですか？」

西村「正直言つて言いにくい」

幸太郎「やっぱね…」

西村「赤コーナー、Cクラス 山中高梨ペア」

幸太郎「相手はCクラスか…」

タクミ「問題ありませんね。いきましよう!」

西村「一回戦、対戦科目数学。始め!」

タクミ&幸太郎「試獣召喚! (サモン!)」

山中&高梨「試獣召喚! (サモン!)」

数学

AFクラス

尾上タクミ 418点

&
野上幸太郎 406点

V S

Cクラス

&
山中加奈子 132点

&
高梨美夏 121点

山中「ちよつ、こんなの勝てるわけ…！」

タクミ「さよなら」

幸太郎「あばよ」

数学

A Fクラス

&
尾上タクミ 418点

&
野上幸太郎 406点

V S

Cクラス

&
山中加奈子 0点

&
高梨美夏 0点

西村「勝者青コーナー 尾上野上ペア！」

幸太郎「ま、相手が悪かったな」

タクミ「え…？うん、うん…分かりました。すぐに戻ります」

タクミはフェイスフォンで電話していた

幸太郎「…どうかしたのか？」

タクミ「今、僕らのクラスが大変な事になってるって、ユウスケさんから電話が…」

幸太郎「何だっつて！すぐに戻るぞ！」

タクミ「はい！」

果たして、AFクラスになにか…！？

次回、第25話 開幕！清涼祭！ 衝撃の来客者に、続く……

第24話 開幕！清涼祭！ 召喚大会一回戦（後書き）

次回、とんでもないキャラクターがたくさん出てきます。

Bクラスの真由美さんの名字は、菊入でよかったですでしょうか？
間違ってたらすいません

第25話 開幕！清涼祭！ 衝撃の来客者（前書き）

今回は、色んなキャラクターがたくさん出てきます。

第25話 開幕！清涼祭！ 衝撃の来客者

自分達のクラスに向かってひたすら走るタクミと幸太郎。

タクミ「一体なんなんでしょうね。とんでもない来客は…！」

幸太郎「さあな。行きや分かるだろ…！」

ようやく着いたタクミと幸太郎。二人は扉を思いつ切り開ける。

二人の視界に入った光景は……

とにかく、ひたすらめっちゃめっちゃ楽しんでいる。

ウルトラ戦士達と、スパロボOGのキャラクター達がいた。

「「「イエイ！」」」

タクミ&幸太郎「「なんだこりゃー！？」」

弦太郎「おう、タクミに幸太郎。紹介するぜ、作者の別作品から来たウルトラ戦士とスパロボOGの人達だ！」

セブン「どうやら全員揃ったようだな」

キョウスケ「ああ。カー…役者は揃ったな」

エクセレン「キョウスケ？今回だけはギャンブルは忘れるって、言っただわよね？」

キョウスケ「何を言うんだエクセレン。俺はちゃんと役者と言ったぞ」

エクセレン「あの約束を早くも破るなんて、いい度胸してるわ」

キョウスケ「だから俺は…」 汗ダラダラ

ブリット「エクセレン少尉…じゃなくて先輩。キョウスケ先輩がもう冷静じゃなくなってる…」

エクセレン「(ニコッ)」

ジャキツ 銀色のマグナム(ブリットの眉間に銃口当てながら)

ブリット「ごめんなさい」

クスハ「…ブリット君、大丈夫？」

タスク「いや〜、にしてもこのクラスには可愛い子ちゃんがいっぱいいるな〜」

アラド「ホントっすね。特に美波さんは、ゼオラの貧乳バージョンみたいなもんだし…」

タスク「ところで、アラド」

アラド「なんすかタスク先輩」

タスク「俺達今、生命が危うい状況にあるような気がするんだが…」

アラド「偶然すね、タスク先輩。俺もっす」

ゴゴゴゴゴゴ とにかく怖いオーラ

タスク「このままだと、殺される。アラド…」

アラド「OKっす、タスク先輩…」

タスク&アラド「散開!」

ダッ 地面蹴る音

ガシッ 捕まった音

アイビス&美波「誰が貧乳で……」

ゼオラ「凶暴な性格ですってーっ！」

バキボキバキボキ 関節技喰らって、骨が折れる音

アラド「ギャアーッス！」

タスク「アラドーっ！」

ガシッ 頭蓋骨掴まれた音

レオナ「タスク…?」

タスク「ごめんなさいごめんなさいどうかお許しください……」

メキメキッ 頭蓋骨にひびが入った音

タスク「(ガクッ)」

イルム「まったく、アイツらと来たら……」

須川「イルムさん！それでその後どうするんですか!?!」

イルム「おう、その後はだな…丁重にレディーを…」

リン「イルム。何の話をしている」

イルム「リ、リン！？いや、これはだな…」

リン「後で話がある。来い」

イルム「ちょ、待った！まだモテない男達に必ずおとせる女性の口説きテクの話が終わってな…」

FFF団「「イルムさん！」「」

マサキ「へえ、コイツが召喚システムって奴か」

リユーネ「マサキ。試しにアタシ達も召喚してみようよ！」

リウセイ「あ、だったら俺とマイもやっていいか？せっかくだし、タッグ戦でも」

マサキ「いいぜ！いくぞリユーネ！」

リユーネ「うん！」

リウセイ「マイ、俺達もいく…って、あれ？マイ？」

マイ「私が先にリュウとやると決めただぞ！」

ラトウーニ「マイじゃ足手まといになるだけ。私と組んだ方がリュウセイも戦いやすいに決まってる…！」

マイ「何だと！」

リュウセイ「あ、あのさあ…二人共喧嘩すんなって」

ラトウーニ「こつなったら…」

マイ「先に相手を倒した方が…」

ラト&マイ「リュウセイ（リュウ）と一緒にペアになる！」

リオ「あ、あれ。リュウセイ君がやるんじゃないんだ」

リョウト「なにか良からぬ事が無ければいいけど…」

カーラ「四人共、準備はいい？」

ユウキ「対戦科目は地理だ。始め！」

マサキ「へ？地理って…」

リユーネ「マサキ！」

マサキ「あ、ああ…」

マサキ&リユーネ」「試獣召喚！（サモン！）」「

ラト&マイ」「試獣召喚！（サモン！）」「

地理

マサキ 4点

&

リユーネ 124点

V S

ラトウーニ 211点

&

マイ 125点

リユーネ「ちよつとマサキ！その点数はないでしょ！」

マサキ「地理は一番苦手なんだからしょうがねえだろ！」

シャイン「あら、ラトウーニの召喚獣はフェアリオンではないのですね」

アヤ「マイも本当はART-1のはずなのに…なんでゲシュペンストなのかしら？」

ライ「隊長…嫌な予感がします。」

ヴィレッタ「ええ。彼程ではないにせよ、耳を塞いだ方が良いわね」

ラトウーニとマイの召喚獣は同時に地面を蹴る

カチーナ「なあアレ、まさかとは思っけどよ…」

ラッセル「やるんですかね、カイ少佐がゲシユペンストに組み込んだあれを…」

ラトウーニ「リュウセイは…」

マイ「私がペアになってみせる…!」

二体の召喚獣は、キックの体勢になる

リユーネ「やばい!マサキ!」

マサキ「リユーネ、お前…」

リユーネ「アレばかりは無理!援護防御お願い!」

マサキ「何でだよ!普通そこはお前が援護防御するんじゃないのかよ!」

ラト&マイ「「きゅーきょくー、ゲシユペンストーっ、
キイイイック!」

地理

マサキ 0点

&

リユーネ 0点

V
S

ラトウーニ 211点

&

マイ 125点

まあ、そうなるよね……bYリョウト・ヒカワ

ギリアム「カイ少佐。あなたの生んだゲシユペンストは、隊の人間の個性を壊しているようにしか見えないのだが…」

カイ「ハッハッハ。ああすれば、どんな奴でも隊の皆と接しあえるぞ」

エルザム「ふむ。相変わらず変わらないな…我が友よ」

ゼンガー「……………」

ギリアム「む？ゼンガー、どうかしたのか？」

ゼンガー「俺の烏龍茶に酒を入れたのは誰だ…」

エルザム「私だ」

カイ「エルザム。後でどうなっても知らんぞ」

アルフィミイ「アクセル。皆とワイワイやらないのですか？」

アクセル「俺はこういうのに慣れてないんでな」

ラミア「隊長。ハメを外す時は外せと、エクセ姉様が…」

アクセル「そういうお前はできているのか？」

ラミア「いえ…」

アクセル「ふん。いくら感情を手に入れたとしても所詮お前は…」

ラミア「男共が息を荒げて気持ち悪いんですコノヤロウ」

アクセル「自分で何とかしろ！それくらい！」

須川「なあ、思ったんだが、スパロボOGの世界の女の人達は皆可愛くてスタイル抜群なのばかりだよな…」

「」「」うむつむ「」「」

須川「だがな…」

須川「彼氏がいるというのは断じて許さん！」

会長『諸君男とはなんだ!』

FFF団『『愛を捨て、哀に生きる者!』』

会長『奴らを殺せーっ!』

FFF団『『オオーっ』』

『『覚悟ーっ!』』

ブリット「えっ?…って、うわあああっと!」

リョウト「ブリット君!って、わあああ!」

ドオン! 巨大な鎌が地面に突き刺さる音

『ちっ、外したか…』

ブリット「いきなり何をするんだ!」

リョウト「あの…僕達何か悪い事したなら謝るけど…?」

クスハ「ブリット君、大丈夫!？」

リオ「ちょっとあなた達!いきなりリョウト君になにするのよ!」

『貴様：そのチャイナドレスのお方は貴様の彼女か？』

リョウト「え…？そうだけど？」

『ならもう謝っても許さん！死ねえーっ！』

FFF団の団員は、リョウトの腹に拳を叩き込む

リョウト「ぐわっ！」

ブリット「リョウト！」

『よそ見している場合か？』

ブリット「何っ！？ぐわああっ！」

クスハ「ブリット君！」

『貴様も彼女持ちだな！死ねえ！』

タスク「へ？ちよっ、うわあああ！」

レオナ「タスク！」

アラド「うわあああ！」

ゼオラ「アラド！」

『キエエエエーッ!』

マサキ「ぐはっ!」

リユーネ「マサキ!」

ユウキ「ぐおっ!」

カーラ「ユウ!」

『貴様のそいつも彼女かーっ!』

ラウル「違っ、コイツは妹…!」

『だが許さん!』

ラウル「ぐわあああ!」

フィオナ「ラウル!」

『ロリっ子二股だと!?許さん!』

リユウセイ「がはっ!」

ラトウーニ「リユウセイ!」

マイ「リユウ!」

『貴様は、ロリっ子とスタイル抜群美人だと!』

アクセル「なに?ぐわあああ!」

アルフィミー「アクセル！」

ラミア「隊長！」

『喰らええええ！』

ライ「ぐはっ…！」

シャイン「ライディ様！」

ラッセル「ぐわっ！」

カチーナ「ラッセル！」

『殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる』

キョウスケ「ぐおっ…かはっ、」

エクセレン「キョウスケ！」

会長『ふははははは！大した事ないな！普段からいちゃついているから体がなまるんだ！』

アクセル「貴様：聞き捨てならんな…！」

シャイン「どうしてあなた達はこのような事を！」

会長『我がFFF団は、男共の幸せを許さんのだ！だからこうして、彼女持ちの男共を粛正しているのだ！』

リオ「そんなの、単にあなた達がモテなくて嫉妬しているだけじゃない！」

リユーネ「そんな事しているから、アンタ達は一生モテないんだよ！」

カチーナ「そうだ！男ならもつと堂々としやがれ！」

会長『ぬうううう、こうなったら貴様諸共あの世で幸せに暮らすがいいわあーっ！』

クスハ&リオ&レオナ&シャイン「「「「きゃああああ！」「」「」

???? 『待ちやがれ!』

会長 『む? 誰だ!?』

???? 『それ以上悲しみを増やすと言つのなら...』

???? 『俺達が相手だ!』

すると、突然CO₂のガスが吹き出ると、FFF団とOGキャラクタの前に、
ウルトラマン、セブン、タロウ、ダイナ、ネクサス、メビウス、ヒカリ、ゼロ達が現れた。

ちなみに、バカテスのメンバーと仮面ライダーのメンバーとOGの残ったメンバー達は、呑気に席につきながら唐突に始まった劇を観ていた……。

次回、第26話 大決戦！ジェラシーFFF帝国に、続く……

第25話 開幕！清涼祭！ 衝撃の来客者（後書き）

私は一体どこに向かってるんだ……。

大決戦！ジェラシーFFF帝国って、なんだよもう……。

感想お待ちしております

第26話 大決戦！ジェラシーFFF帝国（前書き）

前回のあらすじ

嫉妬に燃えるFFF団。

スパロボOGの彼女持ち男性キャラを襲う彼等に、ウルトラ戦士が立ちはだかる！

第26話 大決戦！ジェラシーFFF帝国

会長『ぬう…！ウルトラ戦士め…！我々の邪魔をするな！』

ゼロ『そいつは無理だな。人の自由と幸せをぶち壊すお前らを、許す分けにはいかない！』

マン『今ならまだ改心する気があるなら見逃してやってもいい』

セブン『どうだ。改心する気はあるか？』

会長『ふざけるな！幸せを勝ち取れない男達の憎しみを味あわせてやる！行けー！』

FFF団『ウオオオオオオオ！』

ヒカリ『全く…そんなんだから…』

ダイナ『いつまでたってもお前達は…』

メビウス『幸せが勝ち取れないんです！』

マン『ダアッ！シエアッ！ヘアアッ！』

『ぐおっ！』

『ぐあああー!』

『うおおおー!』

ウルトラマンは、打撃と投げ技を駆使して、FFF団を蹴散らしていく。

セブン『デユワッ!』

『ぐあああー!』

セブンは、アイスラッガーをブーメランの様に飛ばし、FFF団を一斉に倒していく。

タロウ『デヤアアア!』

『うわああー!』

タロウは、アクロバティックな攻撃で、敵の数を減らしていく。

ダイナ『ハアッ、セヤッ、タアアー!』

ダイナは、蹴り技で、FFF団を吹っ飛ばしていく。

ネクサス『ヘアッ、シュッ、テアア!』

ネクサスは、カウンター技でFFF団を蹴散らしていく。

メビウス『ヒカリ!』

ヒカリ『ああ。行くぞ、メビウス!』

メビウス『テヤアアア!』

『『『ぐおおお!』』』

ヒカリ『ハアアアア!』

『『『ぐわあああ!』』』

メビウスとヒカリは、ブレードで、どんどん敵を切り裂いていき、敵の数を減らす。

会長『おのれ…!よくも…!』

ゼロ『お前の相手はこの俺だ!』

会長『ぬうん!フッ、ハッ、テヤア!』

ゼロ『ハッ、セヤッ、ウラア!』

会長『ぐおおお!』

会長は鎌を使って戦い、一方ゼロは、ゼロスラッガーを二刀流で戦い、会長を攻撃する

ゼロ『これでトドメだ！』

ゼロ『ウオオオオ！』

ズバアアア！

会長『ぐわあああ！』

ゼロは、ゼロスラッガーを合体させ、ゼロツインソードにして、会長を切り裂いた。

会長『ぐう…ウルトラ戦士め…！これで終わると思うなよ…！嫉妬の炎が消えぬ限り、FFF団は必ずや男女の幸せを潰してやるぞ…！』

ゼロ『貴様等にそんな権限はない！もしそうであるならば、貴様等のその野望、その歪み、この俺が断ち切る…！』

ゼロが決めゼリフを言った後、会長は倒れ、ウルトラ戦士たちが勝利を収めた形で、劇は終了した。

なお、後にこの劇はDVDでAFクラスの映画と一緒に発売される事になった。

ちなみにタイトルは、『大決戦！ジェラシーFFF帝国』らしい。

士「唐突に始まった劇とは言え、結構客は来たな」

ユウスケ「さすがはウルトラマンって、とこかな？」

弦太朗「みんな今日はありがとな。また遊びに来てくれ！」

エクセレン「もちのロンよ。お互い頑張りましょ！」

ウルトラ戦士とスパロボOGのキャラ達は、灰色のオーラに吞まれ、みんなの前から姿を消した。

士「さて、いい具合に客は増えたし、とりあえず昼休みだな。みんな、自由にまわっていいぞ」

『『『オオーーー!』』』

ユウスケ「土。さっきのあの二人の事なんだけど…」

土「あいつらか…」

海東「ムツツリ君の情報だとBクラスの代表さんとするんでるって、話だよ」

ユウスケ「教頭先生も学園長の失脚と学園を乗っ取る事を狙ってる事も分かってる。なのに、俺達クラスに影響妨害をさせるのは…」

土「だが裏を返せば教頭は焦っている。大方教頭は大学の推薦入学を餌に三人を釣ったんだろ…」

海東「とりあえず僕らがやらなきゃいけない事は召喚大会の優勝商品である腕輪を回収すること。」

ユウスケ「そして、教頭先生の野望を阻止することか…」

土「雄二達の話によれば、召喚大会で相手が変わるといってトラブルがあつたらしい。恐らく、俺達の優勝を阻止する為に奴らが細工したんだろ。」

ユウスケ「そう来るとこっちも対策を練らないとな…」

海東「吉井君と坂本君の次の相手はB、Cの代表ペアらしいよ。情

報を入手したければ、それに勝つしかないね」

士「ああ…そうだな」

ウルトラ戦士とスパロボOGのキャラ達と楽しい時間を満喫した後、士達に待っていたのは教頭の野望だった。

果たして、士達は、教頭の野望を阻止して、学園を救う事ができるだろうか……！？

次回、第27話 召喚大会二回戦 あの紫キノコをぶっ飛ばせ！
に、続く………

第26話 大決戦！ジェラシーFFF帝国（後書き）

DONDONオリジナルになって来ている気がする。
実際そうか。

どうでもいい話。

作者の生まれは神無月。

でも、クラスのあだ名は、

.....師走。

マシムンコト...

第27話 召喚大会二回戦 あの紫キノコをぶっ飛ばせ！

― 召喚大会特設ステージ ―

明久「雄二、二回戦の相手は確か……」

雄二「ああ。BクラスとCクラスの代表カップルだ」

明久「ムツツリー二の情報によれば、さっき営業妨害に来た常夏コンビと根本は手を組んでいるらしいね」

雄二「ここで奴らに勝って情報を手に入れなければならないからな」

明久「そう。でも僕は違う理由で根本をぶっ飛ばすけどね」

雄二「まだあの時の事を引きずっているのか」

明久「別に。ただアイツは一度酷い目にあっているのにまだ懲りないらしいからね。だったら二度と逆らえないように、ここでアイツをぶっ飛ばす」

雄二「そうか。なら、根本はお前に任せるぞ」

明久「オツケー。任せといて」

根本「ほう。誰が相手かと思えば吉井に坂本じゃないか」

小山「あら、AFクラスのバカの方ね。この勝負は貰ったも当然ね」

明久「やれやれ、さっきの二人もそうだけど、なんでこつも口だけは立派なのかなあ雄二？」

雄二「さあな。大方頭に何にも入らなくて、口だけ無駄に立派になつたんじゃないのか？」

明久「なるほど、無駄な努力って奴だね」

根本「なんだと……！」

小山「くっ、その言葉そっくりそのまま返してやるわ……！」

「それでは二回戦を始めてください」

「『『『サモン！』『』『』」

英語W

Bクラス 根本恭二

199点

& amp ;

Cクラス 小山友香

165点

VS

英語W

A Fクラス 坂本雄二

365点

& a m p ;

A Fクラス 吉井明久

295点

根本「なんだと！」

小山「こ、こんなの嘘よ！さてはあんた達細工したわね！」

雄二「おいおい、あんだだけデカ口叩いといてしまいいには現実逃避か？」

明久「これは現実だよ？小山さん」

雄二「明久！根本は任せた！」

明久「雄二も、小山さんを頼んだよ！」

雄二「うおおおお！」

明久「くたばれええええ！」

英語W

Bクラス 根本恭二
0点

& amp ;

Cクラス 小山友香
0点

V S

英語W

A Fクラス 坂本雄二

365点

& amp ;

A Fクラス 吉井明久

295点

「勝者、A Fクラス坂本吉井ペアの勝利！」

友香「そんな……」

雄二「さあ、お前の目的を教えて貰おうか」

根本「く、くそ……！」

明久「負けた君に拒否権なんてないんだよ。早く答えろよ！」

雄二「お前が常夏コンビと手を組んでいる事はもう分かっているんだ」

根本「分かった！教えるから待ってくれ！その拳を降ろしてくれ！」

根本が言っつて、明久は拳を降ろす

根本「教頭に頼まれたんだ。学園長を失脚させれば、大学の推薦入学をさせてやるっつて言われたから……」

雄二「それだけじゃないだろ。」

明久「本当は僕らに復讐しようとしただけなんだから……。答える根本！教頭はどうやって学園長を失脚させるつもりだ！」

根本「教頭は優勝商品の腕輪が欠陥だと言う事を世間に公表して学園の信頼を無くし、学園長を失脚させて、自分が文月学園の新しい学園長になるつもりなんだ」

雄二「なんて事だ…学園の存続が掛かっているじゃないか」

明久「雄二、根本の僕らへの復讐と言い、常夏コンビの営業妨害と言い、もしかして……」

雄二「ああ。教頭の奴は俺達が関与している事に感づいているようだな」

明久「なんとかしても僕らが優勝して、腕輪を回収しないと学園が……！」

タクミ「お〜い！」

幸太郎「二人とも〜！」

明久「タクミ君に幸太郎君。どうしたの？」

タクミ「今、うちの教室に小さな女の子が来て重大な話があるそうなんだ」

幸太郎「ムツツリー二も、早く戻って来て欲しいって」

根本「ククク…そうか。」

タクミ「君は…」

幸太郎「根本恭二…！」

明久「何がおかしいんだ！」

根本「吉井、坂本。お前ら元Fクラスは俺をここまでコケにしてくれたんだ。当然、その報いはしてくるんだろっな？」

雄二「さっきと比べて随分強気だな…」

根本「俺はなあ、教頭にAFクラスを潰せたら大学の推薦入学をさせてやると言われたけどなあ、お前達を潰せって言われたら、俺はタダでも喜んでやるぜ。ギャハハハハハハ！」

幸太郎「こいつ…！」

第27話 召喚大会二回戦 あの紫キノコをぶっ飛ばせ！（後書き）

久々の更新だー！ー！

今回投稿した理由はただひとつ！

お気に入りユーザー一人減ったからだー！ー！

C o m e b a c k お気に入りユーザーアアアアアアアアアアアア
ア！

第28話 爆誕！美少女メイド戦士アキちゃん！

駆け足で教室に向かう四人。よく考えてみると、タクミと幸太郎は本日二度目の駆け足で教室で戻っている。

タクミ「今日はよく走るなあ……」

幸太郎「……………しんど」

明久達が教室に戻ると、小さなツインテール（not 帰マンの怪獣）の女の子がいた。

ユウスケ「あ、四人共戻ったんだね」

葉月「あ、あの時のバカなお兄ちゃんだ！」

明久「君は、確か葉月ちゃん？」

美波「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

明久「去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんと知り合いなの？」

美波「知り合いもなにも、ウチの妹だもの」

明久「へ？そうなの？」

士「まあ、昔話はそこまでにしてくれ。それでチビッ子。この密の少ない理由はなんだ？」

葉月「チビッ子じゃないです、葉月です！」

士「そうか。で、チビッ子。この客の少なさは」

葉月「チビッ子じゃないです、葉月です！」

士「そうか。で、チビッ子」

葉月「チビッ子じゃないです、葉月です！」

士「そうか。で、チビ」

葉月「チビッ子じゃないです、葉月です！」

士「おいチビ。早く教え、ぎゃあああああああああ！」

美波「次バカにしたら骨十本持つてくわ」

士「もう既に相当持つてかれてると思うんだが……」

ユウスケ「それで葉月ちゃん。お兄ちゃん達にこの映画の評判が悪い理由、教えてくれないかな？」

葉月「えっとね、映画は駄作だから行かない方がいい、って噂をあちこちで、聞きました」

弦太朗「さては、さっきのハワイアンコンビだな！」

賢吾「正確には常夏コンビだ」

アंक「アイツら、まだ懲りてないのか」

映司「ゼンガー親分に一刀両断されたクセにまだやるのか」

タクミ「それ、普通に死んでるよね？」

幸太郎「まさかの隠れGV」

カズマ「言わないでそれ。特に俺の前で」

アスム「それで葉月さん。その噂が主にどこから発信されたものか
分かりますか？」

葉月「えつとね、確か向こうのメイド喫茶だったと思います」

愛子「ちょっと待って！メイド喫茶って言つと……」

優子「Bクラスね……」

幸太郎「さっきの根本のあの開き直った態度も気になるし、ここは
一発ぶっ飛ばして……」

雄二「待て幸太郎。」

幸太郎「雄二……」

雄二「ここで暴動なんか起こしたら返って評判が悪くなる」

幸太郎「じゃあ、どうしろってんだよ！」

雄二「なに、心配はいらない。既に作品は考えてある。海東、例の物は盗つてきたか？」

海東「それならもう調達済みだよ」

雄二「そうか。なら、女子はちょっと手伝つてくれないか？」

瑞希& amp; 美波& amp; 翔子& amp; 愛子& amp; 優子
「「「「え？」「」「」

雄二「それと明久」

明久「なに？」

雄二「今回の作戦はお前が重要な鍵を握っているからな」

明久「え？」

数十分後

明久「こんなの絶対に嫌だよ！」

教室からやや離れた場所から通信機で連絡をする雄二

アキちゃん「まだ奴等は来てないけど、一番中央の席に予約があるんだ。」

雄二『予約があるのはその席だけか？』

アキちゃん「うん。」

タクミ『ちなみにその席の椅子の数は？』

アキちゃん「三つくらいかな？」

幸太郎『根本と常夏コンビの数を合わせればちょうどだな』

そんな会話をしていると、根本が戻って来て、更に常夏コンビが来る

アキちゃん「あっ、アイツらが来た！」

幸太郎『どこの席に座った!?!』

アキちゃん「一番中央の予約席に……」

雄二『やっぱり、そこに座ったか』

アキちゃん「雄二、どうするの。仕掛ける？」

雄二『いや、もうちょっと様子を見るぞ』

アキちゃん「分かったよ」

雄二とアキちゃんが会話を終わると、三人はわざとらしく大きな声で会話しだした。

根本「それにしても先輩。見ました？あのAFクラスの映画。」

常村「ああ、あの駄作か」

夏川「高校生にもなって仮面ライダーなんてバカじゃねえの？いい加減卒業しろつての」

根本「無理ですよ先輩。どうせアイツらは精神的にもガキで知能が低いんですから」

夏川「ギャハハハハハ。そいつは言えてるぜ！」

三人の会話は通信機にまで聞こえる程だった

ユウスケ「アイツら……！もう許さねえ！」

愛子「さいてーだね」

優子「人としてどうかしてるわ」

アキちゃん「雄二！僕もう我慢の限界だよ！」

雄二「そうだな。明久。作戦決行だ！」

アキちゃん「了解！」

アキちゃんは三人がいる席に向かった。

アキちゃん「すみません。席を掃除してもよろしいでしょうか？」

夏川「おう、とつとと済ませてくれよ」

常村「ほう。意外と可愛いじゃねえか」

根本「ん…？こんな奴うちのクラスにいたか？」

アキちゃんはテーブルの一本足にあるものを仕掛けて、三人の方に
向いた

アキちゃん「では今からお掃除をさせていただきますね」

夏川「あん？今掃除したんじゃないかったのか？」

アキちゃん「いえいえ、掃除しますよ……あなた達をね」

カチッ

ドオーーン！

アキちゃんは手に持っていたスイッチを押すと、三人が座っていた
テーブルが爆発した。

アキちゃんは掃除の時、仕掛けていたあるものとは、爆弾だったの
だ。

すると、常夏コンビのハゲの方がアキちゃんの胸ぐらを掴んできた。
夏川「てめえ！なにしゃがる！」

アキちゃん「キャアー！この人私の体執拗に触ってきます痴漢で
す助けてー！」

夏川「てめっ、何適当な事言っ……」

フォーゼ「っしゃあああああ！！」 スパイクレッグ装備した状
態でキック

夏川「ごふうあ！」

フォーゼ「痴漢なんて男として恥ずかしくないのか！」

常村「夏川！てめえ……！」

WLM「そいや！」 メタルシャフトで叩きつけた

常村「ぐふうあ！」

WLM「これ以上叩いて欲しければ追加料金が発生するがよろしい
ですか？」

常村「全くよろしくねえぞ！？」

デイケイド「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラ、オラアーー！」 ス〇ー・プラ〇ナラッシュの連打

根本「ぐぼああ！」

デイケイド「とどめだ…！ロードローラーだ！」 どこからともなく出てきたロードローラーでぺしゃんこにした。

三人「ぎゃあああああああああああなんでロードローラーが……」

チーン

デイケイド「死んだか？」

WLM「ていうかどこから出したんだよあのロードローラー」

デイケイド「今朝工事現場からパクってきた」

フォーゼ「へえ〜土って、力あるなあ。」

WLM「いや、つつこむとこそこじゃねえから！」

カズマ「え〜皆さん、聞いてください！」

シンジ「僕達AFクラスの映画を観てくれた方には、なんと無料で美少女メイドアキちゃんと一緒に写真撮影ができますよ！」

アキちゃん「ちよっ、何勝手な事言ってるの!？」

フォーゼ「おう。これも雄二の作戦だ」

アキちゃん「ゆづううじいいいいあのやるおおお！」

デイケイド「落ち着け明久。とりあえず作戦は成功だ。一旦教室に戻るぞ」

士達は、Bクラスの教室を後にした。

フォーゼ「チラッ」 後ろ向いてロードローラー見る

フォーゼ「……あのロードローラーどうすんだ？」

次回、第29話

召喚大会四回戦

え？三回戦じゃないのかつて？

細かい事は気にするな！

に、

続く。クククククククククククククククククク……。

第28話 爆誕！美少女メイド戦士アキちゃん！（後書き）

書くことは特にねえーーーーー！

明久「ええええええええ！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073x/>

仮面ライダーディケイド～バカとテストと召喚獣の世界～（ W、オース、フ

2011年11月29日01時56分発行